
鼓星の下で ~The Sky Where You Were~

空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鼓星の下で ～ The Sky Where You Were ～

【Nコード】

N9218P

【作者名】

空

【あらすじ】

大戦後、西と東に分かれた日本。
分断された空の下、生き別れとなった姉妹はそれぞれの道を歩みだす。

国家という大河に翻弄される中、姉妹に訪れる運命とは？

姉妹系航空妄想戦記スタートです。

R i g e l (前書き)

この話はリアルとリンクしておりません。

また、国名や人名、主義主張は妄想ですのであしからず・・・

R i g e l

湿気った空気が身を包み、木々の放つ濃い臭いが鼻を付く。

木々だけではない。森に住む獣や虫達が発する様々な臭い。

もつと深く、もつと深く獲物の臭いを嗅ごうと彼女は足を止め、大地を、そして木々の間をゆっくりと流れる大気を大きく吸い込んだ。

そこは緑が支配する世界。白より黒の多いその場所で彼女は周囲を見回すようにゆっくりと頭を動かしながら感覚が研ぎ澄まされていくのを実感していた。

本来の自分への回帰なのか。血が高揚する。

それは、作られた血ではなく、古来から体内に流れる赤い血に刻まれた狩りの記憶が呼びさまされているかのようでもあった。

彼女は動かしていた頭をある一点で止めた。彼女の鼻は、この場所には本来いないはずの獣の臭いを確かに捉えていた。

間違うはずはない。それこそ自分が赤ん坊の頃より嗅ぎ続けてきた臭いなのだ。

彼女はゆっくりとその場に伏せた。それが獲物を見つけた時の合

図だった。

彼女の頭に備えられた両の耳が伏せられ、動きを止めた体の変わりにピクピクと動く。

その動きは目標を捉えようとアンテナを回すレーダーのようにも見える。

虫の鳴き声や風に踊る木々のざわめき。その中で、湿った大地を踏みしめる獲物の足音を探すかのように耳を動かす。

「見つけたのか…」

伏せた彼女の後ろで下草が僅かに動く。声を掛けてきた男の顔は塗り練られた土で何時もより黒く見える。

掛けられた声に動かしていた耳を止め、彼女は男の方を一瞥した。そして、また一点の方向に顔を戻し、静かに合図を待つ。

カチカチと小さなクリック音が鳴る。

その音で、彼女は男が後ろにいる仲間達に合図を送っているのを理解した。

無線機と呼ばれる遙か遠くにいる仲間の声が聞こえる不思議な箱伏せて合図を待つ彼女は無線機がどういったモノかは知らなかったが、無線機がどういった働きをするものなのかは理解していた。そして、それが自分にどういった関係を為すかも。無線機の横についたボタンを決まったりリズムで押す男。

彼女は知らなかったが、男の頬にあてられた骨伝導マイクは男と彼女に次の行動を伝えていた。

男の気配が高まる。それは戦いにつく雄の臭い。

彼女は自分の予想が間違っていなかったことを確信した。男の手が自分の首元に添えられる。

さあ、合図を！いつもの言葉を私に下さい。彼女は伏せる体に力を込めた。

男の顔が彼女の頭に近づけられる。男の吐く息に彼女の耳が微かに揺れた。

「いけッ！」

男の言葉を合図に彼女は飛び出した。

目標は300メートル先を進む3人の獲物達。

大地を掴む四肢が彼女を一陣の風へと変える。

下草のトンネルを抜け、湿気った落ち葉で覆われた道を真っ直ぐに進む。

彼女の目が二人の少女と、その少女を守るようにして歩く男の背を捉えたのは間もなくのことだった。

繰り返されるあの日の夢。でも決まって顔が見えない。

逆光の中、顔が見えない姉に向かって「私」が必死に手を伸ばす。

「嫌だ！嫌だよー。一人にしないで！」

叫ぶ。心の底から私が叫んでいる。結末は分かっているというのに。

夢の中の私は何度も叫びながら、姉に向かって腕を伸ばす。

「大丈夫！すぐに戻ってくるから。すぐに戻ってくるからね」

光の向こう、泣く私を安心させるように姉が笑う。これも同じ。いつもと同じ。

顔が見えないのに姉が笑っているのが分かる。

「約束！かならず亜季の所に戻ってくる・・・約束するから」

安心させるように私の手を握る姉。でも私は結末を知っている。

約束、約束だからと姉は握った手を上下させる。でも、この約束は果たされることはないのだ。

心の中で諦める。破局の足音はすぐ近くまで来ているはずだった。

「いたかつ！？」

「いません！何処に行ったんだ！？糞ッたれ！時間がないっていうのに」

すぐ近くで男達の声が聞こえる。そして、その声に被さるように響く激しい銃声。

（来た…）

絶望が心を覆う。分かっているつもり。

私の手を握る姉の手が僅かに震えているのが見えた。

姉も怖いのだ。でも、彼女は最後まで笑顔を浮かべ続けていた。

「これッ！預けとくから！絶対に放しちゃ駄目だよ！」

姉が熊のぬいぐるみを私の腕に押し付けている。

そのぬいぐるみは姉がとても大事にしているものだった。

（嫌だ！嫌だ！行かないで！）

私は叫んだ。姉は帰ってこない。約束は果たされないのだ。

それなのに…

「分かった。早く帰ってきてね」

ぬいぐるみを貰ったことで安心したのか、私は半泣きの顔で頷く。

「私は帰ってくる。それまで隠れているんだよ！じゃありゲルをお願い！」

「待つて！いかないで！」と叫ぶ。でも、私の声は届かない。

ここは失われた時間を永遠に再生し続ける牢獄でしかない。そう。結末は変わらないのだ。私は暗闇の中、一人、姉を待ち続ける。

響く怒声と銃声。どうせ起きたら全てを忘れている。

粘つくような嫌な感触だけを残しながら…。

「気持ち悪い…」

伏倉亜季は汗で濡れた体を起こしながら呟いた。

ベット脇、サイドテーブルの上に置かれた時計は1時を少し過ぎた所だった。

寢床についたのが11時ぐらいだったから、まだ2時間ほどしか

経っていないことになる。

体を動かす度に寝間着替わりに使っているYシャツが拘束具のよ
うに体にまとわりつき酷く気持ち悪い。

「また…あの日の夢か…」

額に張り付く髪をかき上げながら亜季は窓の方を見た。

案の定というべきか、薄いカーテンに覆われた窓の外では雨が降
っていた。シトシトと大地を叩く雨音が世界を包み込んでいる。

雨の日は嫌いだ。その音に亜季は大きく溜息をついた。

雨の降る夜は決まって昔の夢を見る。森の中、一人泣いていたあ
の日の夢を。

「今頃、君のご主人様は何处で何をしているんだろうね？」

亜季はベットに置かれた大きな熊のぬいぐるみに話しかけた。

ぬいぐるみの首には平仮名で「りげる」と丸い字で書かれた赤い
首輪がついていた。

姉が大好きだったリゲル。でも、その姉は今はいない。

「お前は何か覚えてないの？」

亜季は、もの言わぬリゲルを抱き寄せ、その頬に己の頬を擦り付
けた。

年代物のリゲルは少しゴワゴワしたが、未だ柔らかさを失ってい
ない。

あの日、何が起きたか分からない。気づいたら一人だった。

想い出せるのは真っ暗な森の中、一人大きな木に出来た洞の中で泣いていたことだけ。

「お姉ちゃん…」

亜季はリゲルの胸に顔を埋めた。

泣いていた自分に差し出された手。だが、その手は姉のものではなかった。

助けてくれたのは東日本陸軍の軍人達。亜季はリゲルを抱きしめる手に力を込めた。

たった一つの証。姉と自分を繋ぐ唯一の存在。

亜季はリゲルを手放せば全てが消えてなくなりそうで不安だった。もう顔も思い出せない。でも、姉は確かにいたのだ。

「う…う…う…う…」

いつの間にか亜季の目には涙が溢れていた。リゲルの頭が涙に濡れ色を変える。

「寂しいよ…寂しいよ。お姉ちゃん」

雨音に交じる小さな嗚咽。

雨は亜季の悲しみを覆い隠すかのように降り続けた。

「今日のフライトは苦労しそうだわ」

星空を覆い隠す分厚い雨雲。右手の古傷がジクジクと疼く。

西日本航空自衛軍厚木基地、第204航空隊に所属する西村楓は疼く右手を抑えながら恨めしそうに空を見上げた。

深い緑で染められたフライトスーツに覆われた楓の右手には大きな裂傷の後があつた。

厳しい航空身体検査をパスしているのだから別に障害が残っている訳ではない。でも、雨の日に限って傷が痛む。

「痛むのか？」

「ちょっとね…でも心配しないで。フライトには影響ないから」

公私共にコンビを務める高峰長門が差し出すマグカップを受け取りながら楓は答えた。

スクランブル発進に備えての待機。まだ夜は始まったばかりだった。

「影響があるなら飛ばさねーよ」

「大丈夫よ。なんなら試してみる？」

「女王様に逆らう馬鹿はこの基地にいないさ」

冗談めかして言う長門に楓は笑いながら腕まくりしてみせた。

袖から現れる傷跡。さり気無く視線を送る長門はそれ以上何も言わなかった。

弱さは隠さない。それが楓の強さでもあつた。彼女が大丈夫という以上、心配してもしようがない。

傷跡を確認するかのように見て袖を直す楓を見ながら長門はフツと笑った。

「何よ？」

笑う長門を見咎め、楓は口を尖らした。

「何でもない。信用している」

肩をすくめて見せながら長門は自分のマグカップに口をつけた。
口内から喉、そして胃の中へと熱い液体が滑り落ちていく。

一瞬の幸福。芳醇な香りと心地よい酸味が体の中に広がる。

カルモ・デ・ミナス。最近、名が知られるようになってきたこの豆は、コーヒーを作るにはギリギリの標高と手間をかけた生産処理により最高の味を誇る。

さすがはコーヒー大国ブラジルの誇る豆だ。当たれば大きいルワンダも良いが、やはりコーヒーはブラジルだと長門は一人肯く。

だが世の中、コーヒーに拘りを持つ人間ばかりではない。長門は目を剥いた。

「おいッ！」

「何よ？」

「せっかく淹れたんだ。少しは味わってくれないかな。安物のインスタントじゃないんだ」

ビールかなにかのように一気に呷る楓に、長門は棚の方を指差しながら文句を言った。

彼の指の指差す方向には某有名コーヒー店のロゴが入った紙袋が置かれていた。

「ちなみに私物だからな。ちったあ味わえ」

「コーヒーぐらい好きに飲ませてよ」

長門の抗議など完全に無視し、楓はビーカーから二杯目を注いだ。確かに長門の言う通り、インスタントよりは香りがきつい様な感じがするが逆にそれが煩わしい。欲しいのは苦味と熱さだけだ。眠気さまし以上にコーヒーに求めるものなどない。

抗議する長門に対し楓は、これ見よがしとまた一気に呷り、すぐに三杯目をマグカップに注いだ。

「そんなにガブガブ飲んで漏らすなよ」

そんな楓の様子に長門は、スクランブルがかかっても知らんぞと付け加えながらため息をついた。

味の分からぬ者、価値を共有できぬ者に何を言ってもはじまらない。

せめての嫌がらせとヤレヤレとオーバーに手と頭を振ってやる。

「フンツ！昨日や今日飛んだ若造じゃないのよ。自分の体調は自分が一番分かって…」

長門の嫌がらせに楓が腰を浮かしかけたその時だった。待機室に警報が鳴り響く。

目を慣らす為に暗く照明を抑えられた部屋に鋭く神経を掻き巻くベルの音が鳴り響き、待機していた隊員達が一斉に格納庫に通じるドアへと走り出す。

「アンタがいらないうから！」

「俺のせいじゃない！文句なら東の連中に言ってくれ！」

楓と長門も互いに罵り合いながらも待機室から格納庫へと飛び込む。

格納庫の中では、出撃準備を整えた二機のイーグルが彼女達の到着を待ち受けていた。自分の乗機に向かって駆けていく二人。

コクピットに掛けられたラッタルを勢いそのままに駆け上がり、脇に掛けておいたヘルメットを被りながらコクピットへと座る。

楓と長門がコクピットに座りヘルメットを被る頃には、機付整備員達による出撃準備は完了していた。

大きな音を立てて開かれる防爆扉。格納庫にムツとした湿り気が押し寄せてくる。格納庫の外は激しい雨が降り続いていた。

眼前にミサイルの安全ピンを持った整備員が現れ、ピンが抜けたことを知らせてくる。

「視界が悪そうね」

楓は無意識に呟っていた。

広がる暗闇。防爆扉の奥は強い闇が支配していた。

左右に一度大きく振られた誘導灯が外に向け振られる。

「Bandit、How do you read? (こちらリゲル、GCI、感度いかがか?)」

「Rigel Loud and Clear …… (GCI、感度良好 ……)」

楓は、G C I（要撃センター）との無線確認を行いながら、機体を外へと発進させた。

響き渡る轟音。石川島播磨がライセンス生産するF 1 0 0が鉄の塊を空を翔る大鷲へと変える魔法の言葉を紡ぎだす。

名戦闘機に名エンジンあり。名エンジンメーカーP W社が世に送り出したF 1 0 0エンジンは単発で1 0トン以上の推力を叩き出す。

「敵は東みたいだな」

「B B、無駄話は後にして」

グラスコクピット化が進むF - 1 5 J戦闘機。初飛行から3 0年以上経つ老鷲は、近代改装を受け続けることにより未だ日本の空の守護神であり続けていた。

G C Iから送られてくる敵戦闘機の情報。合法非合法問わず収集され続けた敵性情報から防空識別圏を飛ぶ敵機の種類は飛ぶ前から分かっている。

長門の無駄口を止めながら楓は液晶画面に映し出される敵機の情報素早く確認した。この間にもF - 1 5は空を舞う準備を続けている。

（S u - 2 7 Jが二機か・・・いつもの急行便ね・・・）

東日本が装備するS u - 2 7は、大雑把なロシア人が作ったとは思じられない美しさを持つ大型制空戦闘機だ。

一目で空力性能に優れていると分かる見た目に違わない性能を持つ。

ロシア人が設計し、日本人の緻密さによって組み上げられたS u - 2 7 J、通称JフランカーはF - 1 5にとっても侮れない強敵だった。

楓は気を引き締めた。指導者の交代時期が近付きつつある東日本は混乱の度合いを強めつつある。

「偶発的」事故が起きないとは限らない。同じような経緯を持つ隣国がフリゲート艦を撃沈されたのは、つい最近のことだった。

「Rigel、Runway 01 Cleared Take Off!（滑走路クリアー。リゲル、発進せよ!）」

「Rog Rigel、Take Off!（了解。リゲル、発進する）」

楓はスロットルを一杯まで押し込んだ。
ガチッと一度止まる所から、さらにもう一度。ミリタリー出力。
地上に繋ぎ止められていた大鷲は咆哮を上げ、大空へと駆け上る。

「Rigel、Good Hunting（良い狩りを、リゲル）」

「Thank You Bandit」

酷く好戦的な管制官の激励に苦笑いを浮かべながら、データリンクで送られてくる座標に向け楓はF-15を向けた。

後ろは見ない。長門がついてきていることは見ないでも分かった。

「雲が厚い」

キャノピーを叩く雨と星空を覆う雲が夜をさらに暗し、楓の体を闇が包み込む。

体が空に投げ出されているかのように感じるF-2支援戦闘機ほどではないものの、イーグルのコクピットも抜群の見晴しを誇る。
夜間視力を奪わないよう淡い緑で表示される情報を見ながら楓は

呟いた。

空間失調症一步手前。計器の助けが無くては自分がどういう態勢でとんでいるかも分からない。

G C I から送られてくる情報を元に H U D に映し出されるキューポイントに機体軸を合わせる。

「雨の日は嫌いだ」

小さな頃、妹を庇って犬に噛まれた傷。操縦桿を握る右腕に鈍痛が走る。

今頃、あの子はどうしているのだろうか？楓は雲に覆われた空を見上げた。

「貴方もこの空を見上げているのかしら？」

何も映さない真っ暗な空。

楓は妹の泣き顔をキャノピーに見た気がした。

「馬鹿・・・」

楓は樹脂製ヘルメットに覆われた頭を僅かに振った。

守れなかった約束。たった一人山に取り残された妹が生きている可能性は小さい。

それに……楓は浮かんだ可能性を必死に打ち消した。生きていたとしても会える可能性は皆無といって良い。

彼女の頭の中に浮かんだ場所はある意味、宇宙より遠い場所だった。東日本人民共和国。

楓にとってその国は打倒すべき相手。小さな島を二つに分け、西日本が覇権を争う敵国だった。

「雨の日は嫌いだ」

何かを忘れないように疼き続ける右腕。楓はもう一度、空を見上げながら呟いた。

Rigel（後書き）

感想は作品制作の糧となります。

お時間があれば、作品を読んで感じたことなどを教えて頂けると幸いです。

S e c u r i t y

弱い陽光に重たい雲。

鉛色の空が頭上を覆うことの多い北の空も3000メートルも上がれば関係ない。

足元に浮かぶ雲。陽光を遮るものはキャノピー一枚だけだ。

「亜季ちゃん。やっぱり空はいいねー。なんだか体が軽くなったみたいだよ」

「・・・もう良い年なんだから亜季ちゃんは辞めて」

「ええー！？亜季ちゃんは亜季ちゃんだよ」

「・・・・・・・・・・」

北緯38度1分東経138度22分、佐渡島上空3000メートル。

日本人民共和国が支配する空の上を戦闘機のコクピットという最高の観覧席で味わいながら伏倉亜季空軍少尉は溜息をついた。

これがS u i 3 4なら拳骨で黙らせることができるのに……。神をも恐れぬロシア人達（元より彼らに信仰心などないけど）は時折、世間の度肝を抜くトンデモ品を世に送り出す。

戦闘攻撃機ながら並列という操縦席配置を持つS u i 3 4もその一つだ。

バックミラーに映る能天気な笑顔。

亜季にとっては航空学校からの腐れ縁でもある東山利恵少尉が楽しそうに座っていた。

背後で「ちゃん」づけで自分のことを呼ぶ相棒の顔を見て、亜季はもう一度溜息をつく。

残念なことだが同じS u i 2 7の血筋を引くと眷属とはいえ、人民空軍が装備する9 5式戦闘攻撃機の操縦席は同じ複座でも至極まともな縦列配置。

パイロットになる為に鍛え上げた両腕も背中中のシートを超えることは出来ない。

「もう子供じゃないん……」

「ぬいぐるみと添い寝している人が何を言いますか？」

「なっ！？ なっ」

グラリと9 5式の機体が大きく揺れた。

言いかけた言葉に被せるように発せられた利恵の言葉に亜季の顔が朱に染まる。

「危ないなー。亜季ちゃん、何やってんだよー」

「な・なんでアンタが知っているのよ!？」

クスクスと笑い声まで上げ始めた利恵に亜季は猛然と噛みついた。
なぜ・・・知っている!？亜季の脳内に毛並がボサボサになりく
たびれたリゲルの情けない顔が浮ぶ。

確かに自分の部屋のベット、その枕元にリゲルは寝ている。

学校を卒業し、全ての課程を卒業した今、リゲルを隠す必要は無
くなったからだ。

軍隊における幹部の地位は大きい。兵士達とは待遇が違う。個人
に割り当てられた部屋も恩恵の一つ。

学校には持ち込むことの出来なかったリゲルも個人部屋なら遠慮
する必要もない。

「この前、亜季ちゃんの部屋でー」

「寝室にまで入ったのか!？お前は」

年甲斐もなく人差し指を口元に当てながら言う利恵に亜季は怒り
の声を上げた。

部屋が隣の利恵は、頻繁に亜季の部屋に遊びに来ていた。そのど
こかで寝室に侵入したのだろう。

確かに20歳が近い娘の寝室に大きな熊のヌイグルミは少し体裁
が悪い。いや、だからこそリゲルの居場所が寝室だったのに・・・。

「訓練学校の時は、よく一緒に寝たじゃんかよー」

「あの時とは違うでしょ!」

亜季の怒りは収まらない。幹部用宿舎は冷暖房が完備されている。大部屋で、ろくな暖房も効いていなかった訓練学校とは違うのだ。

「一緒のベットで毎晩、体を温めあった仲じゃない。寝室チェックしたぐらいで怒らないでよ」

少しは悪いと思ったのか利恵は口元に当てられた指を降ろしながら言う。

「あれはしかたなくよ！私にその気はない！」

「ええー！？そうなの？あれだけ私の体で遊ん・・・」

「うるさい！人の過去を勝手にねつ造するな」

確かにあの頃は一つのベットに何人もの訓練生が集まって寝たけど・・・言葉とは裏腹に怒りの代わりに懐かしい思い出が亜季の頭をよぎる。

噂に聞くシベリア収容所ほどではないにしろ訓練学校の居住環境はそれは酷いものだった。

部屋中央に置かれたダルマストーブ一つではせいぜい温度をプラスに留めるのが精一杯。

厳しい北国の夜を乗り切る為に同期生達は共に抱き合って夜を過ごした。

ストーブの放つ赤い光と轟々と呻り声を上げる風雪の声。

一つのベットに互いの身を押し付け合いながら、励まし合い厳しい訓練に挑んだあの日が懐かしい。

「やっとここまで来たんだ・・・」

「そうだね」

呟くように吐かれた亜季の言葉に利恵が同意する。

Su-27のライセンス生産から始まり、バージョンアップを繰り返しながら東日本の主力戦闘機の座を占める89式戦闘機。

その89式を元に再設計。戦闘爆撃機、はやりの言葉に直すならマルチロールファイターとして生み出されたのが95式戦闘爆撃機だった。

電子兵装では西側に一步劣るものの搭載量や運動性能など基本性能では米帝の装備するF-15ストライクイーグルを上回る最新鋭機。

「西の連中になんかには負けない」

95式のコクピットシートこそが亜季達が手に入れた努力の証。勝者の座といえた。

亜季は南の方に視線を向ける。

バイザーに隠れているが気の強い視線が遙か彼方に引かれた国境線を射抜く。

「その意気。その意気」

「アンタが言うとか力が抜ける」

「亜季ちゃんの意地悪！」

口を尖らせる利恵に亜季は口元を歪ませた。シートの横から軽く手を振って謝ってみせる。

「ずっと飛んでいられれば良いのに」

亜季は小さな声で呟いた。

気心の知れた仲間に最新鋭の戦闘機。飛んでいる間だけは全てが忘れられる。

視線を下へと向ける。眼下は相変わらず厚い雲に覆われていた。

「・・・空は光に満ちているよ。お姉ちゃん」

暗く寒い大地。空はこんなに光に満ちているというのに。

利恵の笑い声とリユーリカA-131Fターボファンエンジンが奏でるの轟音の中、亜季はどこまでも続く蒼空を見続けた。

取り方によっては、その音も轟音といって良いかもしれない。

サイドテーブルに置かれた目覚まし時計がジリジリと声を上げながら身を震わせる。

薄いレースのカーテンが引かれた部屋はすっかりと光を取り戻し、朝の訪れを住民に知らせていた。

しかし、アラーム音とは裏腹にベットの中、白いシーツに包まれた彼の主人は起きる気配さえみせない。

目覚ましに与えられたミッションは前日に指定された時間までに主人を起こすこと。

音量アップにスヌーズ機能。感情など持つはずもない機械が仮初めの意識を持ったかのように主人を起こそうと奮戦する。

「・・・五月蠅い」

アラーム音に混じり、小さな声がシーツの中から上がる。
もう少し。さあ、起きろ！目覚ましは更にアラームの音を上げていく。

「・・・五月蠅い・・・五月蠅い・・・五月蠅い！！」

目覚ましの努力は報われたかにみえた。

跳ね上げられるシーツ。寝癖でボサボサになった髪に殆ど閉じられた眼をシヨボつかせながら西村楓は怨嗟の声を上げた。

その姿に追い打ちをかけるように更に音量を高めていく目覚まし。彼の仕事は主人に朝を届けること。

だが・・・、

「五月蠅いったら！」

楓の腕がサイドテーブルの上を薙ぎ払う。

いつもならそんな暴挙に出ることはないのだが、異常なほど回数を増しているスクランブル発進と報告書の山が楓から貞淑という言葉を奪っていた。

薄明りに佇む寝室。8畳ほどの部屋に置かれたベットの脇には脱ぎ散らかされた制服や下着がそのまま床を埋めている。

目覚ましを一撃し、そのまま楓はベットに倒れ込んだ。

ボフツと言う音とともに肩口で切り揃えられた髪が枕に広がる。

先ほどまで鳴り響いていたアラーム音の代わりに部屋に響く小さな寝息。西村楓の朝はまだ先になりそうだった・・・。

「・・・で、寝坊の結果がこれだと・・・」

テーブルに並べられた料理を見ながら高峰長門は呆れたように言
った。

「御免なさい。それでも頑張ったのよ」

「久しぶりに手料理を振る舞ってやるから出てこいって言ったのは
誰だっけ？」

「ほんと申し訳ない」

拝むように両手を併せて謝る楓。

彼女と長門に挟まれたテーブルの上には野菜と豚肉を湛えた鍋が
置かれていた。

白菜に豚を織り込むようにして作られた豚鍋。見た目こそ花のよ
うに綺麗だったが・・・所謂、手抜き料理だった。それこそ30分
もあれば用意できる。

「まあ、手の込んだ洋飯にはほど遠いけど、こいつには丁度良いか
な」

それに珍しいものも見れたしな・・・クツクツと音を立てる鍋を
前に珍しく頂垂れる楓の姿に長門は苦笑しながら足元の袋から焼酎
の瓶を取り出した。

「最近忙しかったからな。無理しなくていいさ」

「次こそは必ず・・・」

せつかく二人の時間が取れたのに・・・お前らのせいだー！っと心の中で、東日本空軍の戦闘機や電子戦機を片っ端から叩き落としながら楓は再び頭を下げた。

長門を食事に誘ったのは楓の方からだった。二人が付き合いだして一年。戦闘機パイロットという過酷労働の下では、なかなか互いの時間が合うことも少なく何かと不便。

部隊では嫌でも顔を会わせるが隊内でおっぴらにベタベタする訳にはいかない。例え、周知の事実でも公私に一線を引いているからこそ同じ部隊に入れるのだ。

「だから、無理すんなって。おつ、そろそろよさそうだな。いただきます」

謝ってばかりの楓の姿を笑いながら長門は小皿に白菜と豚肉、スープをよそう。

楓には悪いがスクランブル明けで疲れ切った状態で、揚げ物やソースこつてりの料理よりあっさりとした豚鍋の方が食べれる。

コンソメベースであっさりとした豚鍋は疲れた体でも十分に食欲をそそる一品だ。それに持ってきた焼酎にも合う。

「うまいな」

見た目通りの味わいという調理した者に失礼かもしれないが、これが出来ない者も多い。

出汁の染み込んだ白菜に柔らかく煮込まれた豚肉。唐辛子に山椒、控え目に効かされた辛めの味付けも食欲をさらに促進させる。

「ありがとう」

言葉少な目に黙々と箸を進める長門をうれしそうに見ながら楓も箸を取った。

今更お世辞の言葉なんていらぬ。訂正、たまには欲しくなるけど、無理に言葉を連ねて褒められるより箸を進めてくれる方がうれしい時もある。

（幸せだな）

長門の持ってきた焼酎を彼と自分のコップに注ぎながら楓は目を細めた。

「東日本空軍の増強は我が国にとって大きな脅威となり、早急な対応が必要と言う声も上がっていますが・・・」

「過去の不幸なすれ違いを乗り越え、東日本とは友愛の精神を持つて当たりたい。同じ日本人、私は彼らと分かり合うことが出来ると確信しております。軍事力での恫喝ではなく粘り強い話し合いによって事態の回復を図りたいと思います」

「では国防費の増額は・・・」

「社会保障と税態勢の健全化、これこそが我が民自党の国是であり、むやみな軍拡などは考えておりません」

テレビの中で、幾本ものマイクを突き付けられた小太りで目の大きな男がボソボソと語っていた。

アルコールに浸食された頭でも、彼の言っていることがおかしいことが分かる。

「現場の身にもなってみやがれ」

「どうしたの？何かあった」

食事の片づけを終え、エプロンを外しながら楓が横に座る。

「国防費は据え置き。これで俺達は、あの95式の前に素っ裸で放り出されることが決定した訳だ」

イラただしげにテレビの方を指差しながら長門はコップに残った焼酎を一気に呷った。

テレビに映る男は日本国総理大臣坂秀雄。長門や楓達、日本国軍人にとって最高司令官にあたる人物だった。

「米軍の追い出しに国防予算の縮小。国境線一つ挟んで軍拡に勤しんでいる仮想敵国を抱えながら自ら鎧を脱ぐ奴がどこにいる？」

「モットーは友愛だからね。国家安全保障なんて言葉は総理の辞書にないのよ」

甘えるようにそつと長門の肩に自分の頭を乗せながら楓は言った。東日本に対して強硬的な姿勢を取っていた自由党に代わって政権を取った民自党は、こと軍事面に限定するなら敵国以上の厄災を日本軍にもたらした。

国防予算の縮小に始まり、在日米軍の国外退去。日米安保こそ未だ保たれているものの日本内乱以後、最大の危機といって良いほど東西の軍事バランスは崩れつつある。

必然と偶然。まさかまさかといっている内に状況は悪化し続けた。

「沖縄でもめた米軍はF-22のライセンスを土壇場でひっくり返すし。奴らが本気になったら手酷いことになるぞ」

「世界人類みな兄弟。信じる者は救われる」

「・・・俺は本気で言っているんだが・・・」

長門は楓の冗談を咎めるように肩を大きく上下させる。長門の肩に寄せられた楓の頭が小突かれたように揺れた。

「ごめんなさい。それにしても時期が悪かったわね」

「ああ。まったくだ。東だけでも厄介なのに。最近是中国も活発に動いている。まあ、南は海軍が抑えるとしてもだ。ヤバいことにはかわらない」

人口13億人のマンパワー。経済的に頭打ちを迎え伸び悩む日本や欧州、米国を尻目に発展を続ける中国は、その経済力を軍事力に転換しつつあった。

旧式兵器ばかりで数ばかりと揶揄された人民軍は徐々に近代戦闘に耐えうる軍へと姿を変えつつある。

「皮肉よね。中国が発展すればするほど東の財政事情が潤うなんて」

「東側の軍事工場。ロシア人も半ば公認だからな。設計はロシア、作るのは日本。チャイナバブルで奴らは大喜びだ」

資金と兵器を循環させることによって力を増しつつある東日本。西と東の格差は埋まりつつあった。

経済力で東日本を圧倒していた西日本。少々の軍事優勢など吹き飛ばすほどの経済格差が両国の間に存在していた。

クラウゼビッツの生きた時代とは大きく様相を変えつつある世界だが、いまだ戦争は外交の延長線上にある。

近代戦にはとにかく金がかかる。第1撃を防ぎえる能力、暴発を躊躇させるだけの戦力があれば西日本の安全保障は確保されていたのだ。

今、その抑止力が揺らぎつつある。

「国防音痴の総理に予算縮小。米軍の国外退去に周辺諸国の著しい軍拡。これほど悪い札が連続するのも珍しいわね」

「まったくだ。それに・・・東の指導者の交代も近いだろ。北朝のように後継者の力を見せるための恫喝に出るかもしれん」

「神よ。我を救いたまえ」

ソファの背もたれに頭を預けながら楓は天井を仰ぎ見た。

絶望といって良いのか。でも現実は何も変わらない。国民の多くは危機が迫っていることさえ認識できないだろう。

東日本や中国より長引く不況と社会保障問題の方が大事だからだ。

「海軍の航空母艦をピースボートとして東南アジアに・・・」

テレビで自分の妄想を語る坂の声が耳を打つ。

楓は隣に座る長門の手に自分の手を重ね握りしめた。

「平和は有料なんだよ」

アルコールで痺れる意識。楓はゆっくりと瞼を閉じた。

Happy life

「Rigel Check 6（後方確認） Bogy（敵機）
Angel 240（高度24000フィート）」

「・・・Rog（了解）」

地上要撃管制官の声とほぼ同時に鳴り響くレーダー警報機の悲鳴。神経を掻き乱す単音が耳朶を打つ。

声と同時に身体が動く。ハーフバレル。空と海が入れ替わり、真っ青な南海の海が視界を埋める。

機体を背面降下に入れながら日本航空自衛軍所属西村楓大尉は答えた。こちらの高度は200ちよつと。相手の方が有利なポジションを占めている。

（いくらなんでも・・・これは・・・）

いきなりの大ピンチに楓は心の中で罵倒の声を上げた。攻撃を受けるまで全然、敵機的位置が分からなかった。

降下することにより位置エネルギーを運動エネルギーに変換しながら全力で逃げるF-15Jイーグル。

坂道を転がり落ちるかのような急降下に下腹部に嫌な感覚が走る。胸から足へと血液が体の下部へと落ちていくような不愉快な感覚。

機体進行軸と視線が一致しない。訓練で鍛え上げられた感覚と己の手足を信じながら楓はマイナスGの不快感に耐えながら蒼空の中、

敵機の姿を探す。

（どこだ！？・・・どこにいる）

真っ直ぐに飛べば刹那の間に撃墜されてしまう。

降下しながらもシザーズ機動を織りませ、不規則に機体を揺さぶりながら飛ぶが未だ警報は鳴りやまない。

操縦桿を握るグローブの中、手がじつとりと汗ばむ。不安と焦りが徐々に心を覆っていくのを楓は感じていた。

（まだだ・・・敵の姿も見ずにやられてたまるか！！）

楓は自分自身を必死に叱咤する。

勿論、この間も彼女の眼は敵機の姿を蒼空に追い求め、手足はイーグルを操り続けていた。

激しく動かされる化学繊維で編まれたヘルメット。現代の魔弾ともいえる対空ミサイルの命中率は100パーセントに限りなく近い。警報は続いていた。敵機はまだ後ろにいる。機体を再び反転させシヤンデルへ。再び、視界を蒼空が埋める。

降下することによりたつぷりとパワーを稼いだイーグルは楓に答えるかのように鋭く身を擦る。

「・・・In Site・・・ちっ・・・Raptor（敵機発見、敵はラプター）」

（こんなに近くにいたのか！？）

報告しながら楓は舌打ちした。高速ですれ違つF-15に良く似た機影。

しかし、戦闘機パイロットとして鍛え上げられた楓の眼はその機

体の正体をはつきりと掴んでいた。

ステルスを意識し、エイを思わせるようなのっぺりとした機体。そして尾から突き出た特徴的な推力偏向ノズル。

F-22ラプター。F-15イーグルに変わり米空軍の世界最強の座を守護する新たな戦いの翼。

（よりによってラプターとはね・・・）

特徴的な機影を視線にとらえ続けながら楓は体の奥底が熱くなるのを感じていた。

訓練で対戦する機体や部隊構成は相手に「出会う」まで教えられない。

（ぐっ・・・逃がすか！）

スロットルを僅かに緩め、機体を旋回に入れる。

翼を翻す大鷲。体に締め付けるGが最適のコーナー・ベロシティを楓に教える。やみくもにアフターバーナーを吹かしても機体は曲がらない。

だが、そんな楓の努力をあざ笑うかのようにラプターは彼女の視線の端へ端へと進んでいく。早い。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

自分の吐息の音がうつとしい。Gが体と精神を締め付ける。

ラプターとイーグルの機体性能差は圧倒的だ。

米空軍の実験でラプターは従来機との戦闘訓練において144対1という実験結果を疑うような結果を叩き出している。

「じほっ！・・・それでもっ！」

影だけでも逃がさない。楓はラプターを追い続けた。

シャンドルの途中、いやラプターはいつでもこちらをKILLしてきた。遊ばれてなんかやるものか。

ラプターの姿を視界内に必死で捉えながら楓は叫んだ。無理に叫んだ為、肺が悲鳴を上げ咳込む。だが楓は、その痛みを無視した。

負けを望む戦闘機パイロットなんて世界中、どここの空を探したつていやしない。

体の痛みは我慢できるが傷つけられたプライドは容易に癒されないのだ。

攻守が入れ替わり、ラプターを追うイーグル。ドッグファイト。

推力偏向ノズルの恩恵を受け、旋回径の内へ内へと切り込むラプターに対し、イーグルは機体の限界性能を持って挑む。

右旋回の途中、空の法則を半ば無視するかのように直線的に進路を変え、跳ね上がるようにして上昇するラプター。

逆方向に吹っ飛ぶように機体進路を向けたラプターを追い、イーグルは素早く機体をハーフロールに入れ、旋回。

ラプターの僅かに外を通り、イーグルの翼が蒼空にラインを引く。蒼空に引かれる二条のコントロール。直線と曲線が織りなす幾何学模様が大空のキャンバスに描かれていく。

それは形こそ変えど一流の絵画と同じ価値を持つ芸術だった。

本物の絵画と違う所は、見る者を選ぶことと、刹那の時間しか楽しめないこと。

イーグルとラプターの戦いもその原則を変えることはなかった。変則のシザース機動を繰り返しながら互いの背を狙うイーグルとラプター。

ついに楓の眼がラプターの背を捉える。

「Rigel・・・」

操縦桿を握る手が兵装選択ボタンをクリック。選ぶのはAAM5、04式対空誘導弾。

大柄で角ばった主翼。HMD、ヘルメットの動きと同調したミサイルシーカーがラプターをロック。単音から長音へ。

勝利を確信し、楓はトリガーを引く指に力を込める。

ラプターが動いたのは、その瞬間だった。

「Fox・・・ツ、何ッ!？」

楓は驚きの声を抑えきれなかった。

いきなり機首を上げるラプター。高度変化なし。視界一杯に特徴的な機体が壁のように聳え立つ。

楓に出来たことは激突を避ける為に咄嗟にロールを打つことだけ。機体全体をコントロールで真っ白に染めながら後方へとラプターが消えていく。

コブラ機動。

1989年、パリ航空ショーにおいてヴィクトル・プガチョフによつて初めて世に出た戦闘機動が場所を変え、グアムの地で再現されたのだった。

「ふざけんじやないわよ！あんなの反則よ！反則！安全守則も何もあつたもんじやないじゃない」

「分かった・・・分かったからもう少し声を抑えてくれ・・・」

カウンターの中でコップを磨くバーテンの視線が痛い。

隣に喚く酔っ払い、楓の肩に手を置きながら高峰長門は言った。

こんなことなら労を惜しまず、基地の外に出れば良かったと後悔するが今更遅い。

（はあ・・・やっちまったなー）

グアム、アンダーセン米空軍基地。

その一角にあるオフィサースクラブのスツールに腰掛けながら長門は溜息をついた。

アルコールと興奮で顔を朱に染めた楓はいつもとは違う魅力があるがそれも限度がある。

「なんで長門は悔しくないのよー」

そんな長門の気持ちを知らずに、また隣で酔っ払いが氣勢を上げる。

昼に行われた米軍とのD A C T、異機種空戦訓練においてF - 22ラプターに負けたのがよほど悔しいらしい。

衝突回避を優先し、ラプターを回避した楓はその直後にガン攻撃を受けて撃墜判定をもらっていた。

「いや俺だって悔しいさ。でもな。考えてみるよ。相手はラプターだ。本当ならB V Rでやられていた所を格闘戦に付き合ってくれたんだ。少しは感謝しろよ」

そういう長門は遠距離からのアムラームの一撃で撃墜判定を貰っていた。

BVR（視界外戦闘）と格闘戦。政治的問題から同盟関係にヒビが入りつつある中、米空軍は良くやってくれたといえる。

彼らは自分達の持つジョーカーの力をわざわざ曝してくれたのだ。世界唯一のステルス戦闘機との空戦訓練は、西日本にとってこれ以上ない貴重な経験となるだろう。

「将来的には中国やロシア、ロシアが作れば当然、東の連中も導入するだろう」

ウイスキーの入ったグラスを弄びながら長門は言葉を続けた。グラスの中の氷がクルリと回る。

今は同盟国であるアメリカしか持っていないが、将来的に仮想敵である東日本や中国、ロシアがステルスを導入する可能性は大きい。身を持って体験したステルスの威力。東側が本格導入する前に対策を立てる必要がある。それが出来なければ西日本は終わりだ。

「三型にはIRSTや新型誘導弾の搭載も予定されている。それにフ兰卡ーだつてコブ・・・」

そこまで言つて長門は口を閉じた。いや、閉じずにいられなかった。

東側と酔っ払いに正論は通じない。彼はそのことをすっかり忘れていた。

今の楓にとつての敵はラプター。そして必要なものといえばIRSTでも新型誘導弾でもなく愚痴を聞いてくれる男だったのだ。静かになったと思い、ふと隣の方を見た長門の眼に酔っ払い特有のアルコールに侵されトロンとした目つきで自分の方を睨みつける

楓の姿が飛び込んでくる。

長門が不味いと思った時には全てが手遅れだった。

「長門の馬鹿ー！負けて喜ぶ奴がどこにいるのよ！この玉無し！チキン！臆病者ー！×××！」

ギアアギアと喚きながら楓が掴みかかってくる。

「落ち着け！落ち着けて！×××は言い過ぎだったの！それにほらッ！周りを見てみる。みんな、こっちの方見てるぞ！」

女だが相手は戦闘機パイロット。鍛えられた腕力は侮れない。そんな楓を長門は必死に収めようとするが、彼女の怒りは高まるばかりだった。

うーうーと小動物のような呻き声とともに拳の雨を長門に降らせる。

そして、悪いことに状況も長門に組しなかった。

普段は静かなオフィスクラブ。しかし、この日は休みの前日ということも多く、戦闘機パイロットが来店していた。

今回、グアムに派遣された日本軍の中で女性パイロットは楓しかない。

日本よりよほど門戸の開かれた米軍といえどもまだまだ女性戦闘機パイロットの数は少なく、物珍しさから楓は基地内でも一時的な時の人だ。

その楓が男に殴りかかっているとなれば騒ぎにならない訳がない。囃し立てる様な口笛とともに歓声上がる。

「せんきゅー！じえんとるめん！」

声援に調子に乗った楓がほとんど回っていない舌でギャラリに
応える。

そして、無責任な民意を背に長門への攻勢をますます強めていく。

（もう・・・こうなったら為るようになれだな・・・）

せつかくのグアム。気分的には楓と二人で静かな時間を送りたかったのだがこうなってはしょうがない。

背中や頭に走る痛みを無視しながら長門は苦笑いを浮かべた。

華やかな喧噪が周囲を支配する中、ガードする手の隙間から楓の顔をのぞき見る。

そこには楽しそうに自分に向かって拳を振り下ろす楓の姿があった。

朱に染まった顔に、いつもより目じりの下がった瞳。

（最近忙しかったしな・・・たまにはこういうのもいいか）

長門は笑みを浮かべた。

心の辞書に洋酒と訓練の話は禁句と書き加えながら・・・。

南洋の空が生命感溢れる色濃い青なら、冬の日本海の空は凍てついた灰色の空といえる。

薄雲のベールに弱い陽光。晴れていてもどこか白濁とした色合いを見せる空が気分を滅入らせた。

（高度を上げることが出来ればな・・・）

95式戦闘爆撃機のコクピットの中、東日本空軍伏倉亜季少尉は、心の中でそつと呟いた。

雲を抜ければ澄み切った空がある。しかし、現状は伸ばす手はあっても掴むことは許されない。

高度15メートル。感覚的には地表に張り付くような低高度を飛ぶ95式。

気をつかってくれているのだろう。いつもは五月蠅いぐらいに元気な後席の利恵も今日は沈黙を保っている。

対地攻撃能力を付与されているとはいえ95式は、米帝のF-15Eストライクイーグルが装備するLANTIANのような高性能な航法システムを持たない。

地形追従用レーダーと前方監視用の赤外線センサーこそ装備しているものの自動化されておらず、パイロットの腕に頼る部分が大きいのだ。

阿賀野川と信濃川に挟まれるようにして築かれた新潟空軍基地を飛び立ってから30分。

一度、日本海に出てからランドマークである弥彦山を左に見て旋回。平野部を抜けた所で一気に高度を落とし、内陸に向かって侵攻開始する。

越後山地に連なる山々に機体を擦り付けるようにして川を溯り、谷を抜け、稜線より低く飛ばなくてはならない。

難しいけどやり遂げる。亜季は冷静さの中で、静かなる闘志を燃やしていた。

新鋭戦闘機パイロットの座を手に入れたといっても、まだまだ新人の亜季にとって95式を手足のように操り、一人前と認められるまでには、まだまだ上るべき階段は多くあった。

今回の低空侵攻訓練もその一つ。さらには今回の訓練をパスできたとしても次は同じことを夜間に行わなくてはならない。

東日本空軍では夜間低空侵攻が可能になって初めて一人前の95式パイロットと認められるのだ。

それまではOJT、飛行隊に配属後も訓練を続け、任務につくことを許されない。

「目標まで10キロ。攻撃準備」

「了解。タイミングは任せるわ」

後席で兵装管理を担当する利恵が声を掛けてくる。

訓練目標である田子倉ダムまで後少し。亜季は酸素マスクの中、唇を噛んだ。

右手に守門岳。その少し奥、左に見える浅草岳の裏に目標はある。

「いくよ！」

「了解！」

利恵の声を聞きながら、亜季はスロットルを微妙に調整しながら機速を調整していく。

守門岳と浅草岳の間を抜けて、左旋回。浅草岳をグルリと周りながらダムを爆撃。その後は同じ飛行経路を通って離脱する。

迫る山肌。翼端が木々に触れるかのような錯覚。浅草岳を回った瞬間に機体軸をダムへと乗せる。

「用意・・・てー」

後席で利恵の声が聞こえる。しかし、亜季に戦果の確認をしてい
る暇はなかった。

再び山肌が迫る。ダムを飛び越え、高度を下げるが再び浅草岳が
道を塞ぐ。北へと延びる浅草岳の峰が離脱の障害になるのだ。

飛行データは後で全て解析される。誤魔化しはきかない。

亜季は山に突っこむかのように勢いで95式を飛ばした。ハード
ル選手のように峰を飛び越えては、すぐに高度を下げる。

（絶対合格するんだ！）

冷静と情熱の狭間で亜季は、立ちふさがる越後の山々をキツと睨
みつけた。

「かんぱーい」

綺麗にはもる二つ声。

続いて打ち合わされたコップが立てる澄んだ音が響く。

「ぶっはー！やったね！亜季ちゃん！」

コップに注がれたビールが瞬く間に消える。

一気にコップを空にした利恵は、アルコール濃度の高い息を吐き
ながら口を開いた。

年頃の乙女としては少し恥じらいが足りないかもしれないが、この場所にそんな些細なことを気にする者は誰もいない。

「まあね。パイロットの腕が良いから当然でしょ！」

「ええー。爆弾をダムに命中させたのは私だよー」

少し顎を上向きに胸を張る亜季に利恵が抗議の声を上げる。
勿論のことだが机に置かれた亜季のコップも利恵のものと同様、空になっていた。

「何言っているのよ。機体姿勢良し。ドンピシャの侵入コースだったでしょ。私のお蔭だね」

片目を瞑り、利恵に指鉄砲をつきつけながら亜季は答えた。

「爆弾を落としたのは私だもん！」

パイロットも重要だが戦術航空士（米軍で言うところのWSO、兵装システム士官）も重要。

自分と亜季のコップにビールを注ぎながら利恵も食って掛かる。

「何よ！私が飛ばさなければ、そもそも目的地につけないでしょうが」

テーブルに両手を叩きつけ亜季は身を乗り出す。

「何さ！私がいなくちゃ航法も爆撃もできないもん！」

負けじと利恵も身を乗り出す。

「私のお蔭！」

「私だもん！」

威嚇しあうようにうーうーと呻りあいながら顔を突き合わせる亜季と利恵。

注文の途中、二人の喧嘩を見止めた店員がハラハラしながら引く末を見守る。

しかし、彼の心配は杞憂だった。

「ふっ・・・ふっふふふ」

最初は小さく、そして徐々に大きく。どちらが先かなんて問題じゃない。

合わせられたおでこ。亜季と利恵の肩が小さく揺れる。

「ふっ・・・はははは！おめでとう。利恵」

そして、ついには我慢しきれなかった亜季が顔を上げ笑いながら手を上げた。

「はははは！おめでとう。亜季ちゃん！」

上げられた手に自分の手を叩きつけながら利恵も笑う。

昼間に行われた低空侵入訓練、命を削るような訓練の評価は「優良」 合格だった。

「次は夜間よ！明日からも気合入れていこう！」

「了解ー！」

声とともに打ち合わせられる二つのジョッキ。
亜季と利恵の顔は喜びに満ちていた。

A p p r o a c h r u n

鉛の様に思い体を引きずるようにして歩く。駐機場から待機室までという僅かな距離でさえ今は苦痛だった。

整備員達の手前、見栄の一つも張りたいが如何せん体が言つこと聞かない。

「んツ・・・」

他人目も憚らず首と肩をゴキゴキと鳴らす。

一日の労働を終え、大地の彼方に沈みつつある太陽を見ながら楓は溜息をついた。

「・・・疲れたわー」

薄紅色に焼けた夕空が、やけに目に染みる。

滑走路は未だ喧噪に満ちていた。

ジェットエンジンの奏でる甲高い高周波音が夜を迎え入れつつある世界に木霊する。

「何・・・ばば臭いこと言ってたんだ？」

「五月蠅い」

笑う長門に楓は文句を言いながら頬を膨らませた。

「これ持つて！」

文句を言いながら手に持ったヘルメットを押し付ける。

「おいおい、それぐらい自分で持てよ」

高Gに疲れた腕に確かな重さを感じる。楓が押し付けるヘルメットを、長門は言い返しつつも受け取った。

楓から受け取る傷一つない新品のように綺麗なヘルメット。

それは米国や欧州に遅れること、最近になってやっと導入された
ヘッドマウントディスプレイ
始めたHMD装備型ヘルメットだった。

まだ全戦闘機にはいかなかったが、新型対空誘導弾やIRST導入に合わせるように徐々に装備数を増やしつつある。

「新型はどうだった？」

「これ以上、首が太くなったら隊長に責任を取ってもらっわ」

長門の言葉に、ヘルメットを渡し、開いた手を肩口に当てながら
楓は首を振った。

「様は慣れの問題なんだろうけど・・・頭の上に重りが追加された
みたいで私は嫌い」

「スペックではそれほど増えていないんだけどな」

HMD装備型ヘルメット、航空安全帽？型は、これまで使用され

ていた？型と比べ500グラムほど重い。

「まだ空の上ではあまり気にならないんだけど・・・降りた途端、コレよ・・・」

相当こつているらしい。言いながらゴキツとまた楓は首を鳴らした。

「利点はデカインだけだな・・・」

長門は、先ほど自分達が止めたばかりのイーグルの方向を振り返りながら言った。

駐機場に並べられたイーグルの列。

良く見るとそこには他の大鷲とは少し毛色の違うものが1機だけ混じっていた。

「そうね。悪くないと思う・・・悪くない・・・だけど、重いのよ！」

振り返る長門と同じ様に足を止め、愛機を見ながら楓は少し考えるようにして言った。

西日本の空を守り続けてきた大鷲もベテランの域を超え、そろそろ老兵の域へと入りつつあった。

欧州の装備するタイフーン、東日本やロシア、中国の装備する新型スホーイを代表とする第4・5世代機。そして、唯一の第5世代戦闘機ラプター。

これらの新たな戦翼の台頭は、最強の戦翼の名を欲しいままとしたイーグルを急速に陳腐化させようとしていたのだった。

これら新型機の台頭に日本国防空軍も手を拱いていた訳ではない。レーダーやセントラルコンピューターをはじめとするアビオニクスを更新、コクピットの先進化やIRSTの装備などイーグルの延命処置を行っていた。

だが、

「あんまり文句言つなよ。他を差し置いて一人新型に乗ってるんだ。新しいことは良いことだよ」

子供のようにむくれる楓の頭をポンポンと叩きながら長門は笑う。年々削減され続ける国防予算のあたりを受け、新型イーグルの導入スピードは情勢を考えると驚くほど緩やかなものだった。

「それはそうだけどさ・・・」

頭に乗せられた手を払いのけながら楓は言った。

個人専用機という概念のない西日本航空自衛軍であるが、新型機へ乗る為の教育、完熟訓練にはどうしても順番が出る。

現在、厚木基地に所属する第204航空隊には、楓の他に新型イーグル（形態？型）への転換訓練を終えた者はいなかった。

導入される機体自体が少ないのだからパイロットの機種転換訓練も進まない。

その為、おのずと第204航空隊が所有する新型イーグルは、楓の専用機のようになっていた。

「改修というよりは新造に近い機体だしな。年間6機、改修が済ん

だ機体は出来た傍から南に行っちゃうし・・・」

悪戯心満点の機付整備員達を書いたのだろう。

少し外側に傾斜した新型イーグルの垂直尾翼には鮭の代わりに、デフォルメされてはいるが、どう見てもスホーイにしか見えない戦闘機を前足でほうり上げる熊の姿が描かれていた。

「アイツは当分、お前のモノだよ」

「はあ、勘弁してよ・・・」

長門の指差す熊の絵を見た楓は、片手で顔を抑えつつ大きく溜息をついた。

形態？型は、これまでの形態？型までの改修工事とは違い、変更点は外装にまで及んでいる。製造日が若い機体や機体フレームの疲労度が少ないモノを選んで改修される形態？型は、限定的ながらもステルス化の一貫として、電波吸収塗料の採用や一部機体構造材の変更、エアインタークーへのレーザーブロッカーの装備、垂直尾翼の傾斜などが図られ、更にはエンジンの強化（F110への変更）、コンフォーマル・フューエルタンクの装備など多岐に渡っていた。その為、形態？型は、形こそイーグルで合っても飛行特性から電子装備まで旧タイプの物とは一線を画くシロモノであった。

「見てくれは悪いが中身は飛びつきりだ。まあ、誰かさ・・・」

「私は太ってないわよ」

「い、いや。俺は何も・・・」

ギロツと音が聞こえそうな勢いで睨みつける楓の視線に言葉を飲み込みながら長門はもう一度、新型イーグルの方を見た。

コンフォーマル・フューエルタンクの採用により機体のラインが膨らみ、元来、イーグルの持っていたシャープなデザインを崩してしまった形態？型。

ステルス化の為の角ばったラインがそれに拍車をかける。その姿は大驚というよりは太った七面鳥のようにも感じられた。

「セカンドもそうだけど何か恰好悪いよね。やっぱり」

長門の気持ちを讀んだかのように楓が言葉を漏らす。

セカンドとはファントムの後継機として導入を考えられたラプターが生産国である米国議会の反対により早期に導入することが難しくなり、その代わりにと40機の生産が認められたF-2改のことだった。ゼロ・セカンドもまたこれまでの運用実績と技術進歩に合わせて様々な改良がなされている。その一つがイーグル形態？型と同じように（セカンドは背中）追加されたコンフォーマル・フューエルタンクだった。この追加装備により、元より戦闘半径に定評のあったゼロ・セカンドはさらなる足を手に入れることができた。

しかし、

「ゼロ・セカンドも悪い機体じゃないんだけどな・・・」

イーグル形態？型と同じようにコンフォーマル・フューエルタンクを装備するゼロ・セカンド（F-2改）もまた、その性能は兎も角、搭乗員から受けの悪い機体であった。

盛り上がった背中、フューエルタンクに口傘のないパイロットの

中には駱駝と蔑む者もいる。

「同じ改造機でも95式はあんなに綺麗な機体なのに」

「まあ、デザインは性能に含まれんし。いいんじゃないか」

——感性の違いなのかな……。

同じ戦う翼なのに、こつも姿が違う。敵を打倒するという目的はかわらないのに。

残念そうに呟く楓に、長門は東日本空軍の装備する大型戦闘機の姿を脳裏に思い浮かべながら答えた。

「ようは勝ちゃあいいんだよ」

「それはそうんだけどさ……」

あえてぶつきら棒に答える長門に、楓は苦笑いを浮かべた。

本来なら憎むべき仮想敵である95式戦闘爆撃機。しかし、その姿は飛行機械として類い稀な美しさを持っていた。

例えるなら大鶴。優美で力強い姿は日本人の感性を刺激する。

「そろそろ行こうぜ。今日は上手いモノ食べさせてくれるんだろ」

空気を、気持ちを変えるかのように長門はヘルメットを掛けた腕を上げながら言った。

「ええ。任せてよ」

楓もまた、そんな長門の気持ちに応えるように上げられた拳に自分の拳を合わせながら言う。

「待ち合わせは、何時もの場所で」

「YES! Ma·am」

ふざけた様に言う長門に楓は笑顔を浮かべた。

最後に愛機を一瞥し、背を向ける二人。兵士が敵を褒める意味は一つしかない。

—— 明日もよろしくね（な） 相棒。

待機所に向かる楓達の背後では、夜間訓練に向かう大鷲の群れが滑走路に向けてタキシングしていく。

轟音と微かに漂う燃料の焼けた匂い。
喧噪が続く厚木基地。大鷲達が眠りにつくにはもう暫く時間が掛りそうだった。

「へ・・・へ・・・クシユン！」

ガクリと機体が大きく揺れる。

高機動力の裏返しでもある繊細さ。95式は、サイドスティック

を操る両腕の僅かな動きをも見逃すことはない。

「亜季ちゃん・・・」

「誰かが私のことを噂してんのよ！」

恨めしい声を上げる利恵を、恥ずかしさを隠すように怒鳴りつける。

「気をつけてよ。ただでさえ今日は危ないんだから！」

「ゴメン。ゴメン」

珍しく真面目なこと言う利恵。今度は素直に謝る。

確かに現状を考えれば、利恵の言う通りもう少し緊張感を持ってやるべきことだった。

機体を包み込む夜の帳。

1800に新潟を飛び立って、早30分。つるべ落としてはよく言ったもので秋の太陽は沈むのが早い。

待機空域に着いた時には、周囲はすっかり夜を迎えていた。

「クロエからミサキ。予定通り、1900より新潟全域に灯下管制が敷かれる。状況に変化無し。繰り返す、状況に変化なし」

「状況に変化無し。ミサキ了解」

地上に広がる宝石箱。初めて夜間飛行を行った時は、天の星空と

並び感慨深く感じた街の明かりを確認しながら亜季は答えた。
クローエ、地上管制が伝えてくる情報では訓練は問題なく進行して
いるらしい。

「利恵、準備はいい？」

「兵装確認問題なし。いつでもいけるよ」

「了解。今日は失敗できないからね。へましたら許さないわよ」

亜季は計器類をザッと確認しながら言った。

夜間視力を落とさないように光度を下げられた計器類をチェック
しながら楓は言った。

比較的、グラスコクピット化が進んでいる95式であったが、ま
だ西側の最新鋭機のように全てを液晶画面に表示という訳にはいかな
い。

特にパイロットが座る前席は、旧態依然とした計器類が並んでい
る。

「訓練とはいえ、作戦行動中に可愛いクシャミをする人に言われた
くありません」

——前言撤回・・・外さなくても許さない・・・

やはり利恵は利恵だった。

たまには真面目なことを言うと感じしかけていた自分を罵倒しな
がら、亜季はギリギリと歯を噛み締めた。

「あまつさえ機体を揺らすなんて・・・これが低空侵攻中だと思っ

たら・・・」

クシユンだつてとわざとらしく下手な物真似まで付けて利恵の言葉は続く。

しかし、亜季も言われぱなしで我慢するほど人間は出来ていない。

「都市部を50mで抜けていくんだよ。送電線や高層ビル。危険は一杯なのに・・・ああ、下手なパイロットとコン・・・ウギヤ！」

気持ち良く楓のことを弄っていた利恵は突如、ロールした機体に舌を噛み、悲鳴を上げた。

「な・・・何するさ！」

素早く無線の送信ボタンの固定を外す（これを外さないと声がダダ漏れになる）と利恵は猛然と叫んだ。

「あら・・・訓練生でもあるまいに、ローラーつで無様に悲鳴を上げるなんて、航学上がりとは思えない醜態ね」

誰にもバレずに復讐をやり遂げた亜季は、バイザーの下、満足気なドヤ顔を浮かべながら言い返した。

当然の事ながら地上のレーダーサイトは自分達、訓練機のことを追跡しているが、レーダーでは進路、高度、速力は分かっても機体がどんな機動をしているかまでは分からない。

大きく旋回したりすれば警告されるが、同一進路でロールを打つてもバレはしないのだ。

「小さい女だね・・・亜季ちゃんは！」

「あんたに言われたくないわよ！あんたには」

訓練前だと言うのに狭いコクピットの中、互いを罵り合う亜季と利恵。

再び機体をロールさせ、背面降下する95式。作戦開始時間が迫っていた。

高度3000mから2000mまで一気に降下。2000mで再びロールし、機体を水平にする。

見た目や言動とは裏腹に、空を滑るかのようになめらかに機体を操る亜季。そんな彼女の後ろでは、利恵が素早く敵性電波の状態を確認する。

「敵搜索波受信。高度50まで下げ。無い乳！」

「了解。高度50！ホルスタイン！垂れ乳予備軍！」

機体を操りながらも、外部に漏れないように無線スイッチを器用に切り替えながら罵り合いは続く。

「クロエからミサキ。変更なし。突入！突入！突入！」

「ミサキ了解！行くわよ！ぜい肉」

「敵搜索波、弱まる！現高度維持。進路35度、次の変針点まで約3分20秒。航空障害物等無し。うるさいッ！洗濯板」

新潟沖から内陸部へ低空侵攻。ここまでは何時もと変わらない。しかし、今日の訓練は進路が違っていた。

いつもの南東方向ではない。今日は北西。沿岸部を掠めるようにしながら新潟市内へと向かう。

街の明かりが奔流のように95式の翼の下を流れていく。だが、その美しく幻想的な風景を亜季は極力視界に入れないようにしていた。

「1900、灯下管制開始」

管制官の声とともに街の明かりが一斉に消える。

突然の暗闇に、生理現象で体が強張りそうになるのを意志で押さえつけ亜季は叫んだ。

「肉！」

「板！」

ついには板と肉になってしまった亜季と利恵。

亜季の声に利恵は一瞬だけ地上搜索レーダーの火を入れ、グラウンドマップを作成する。

位置情報と読み込んできた航空写真をレーダーの作り出したグラウンドマップに重ね、現状で最適な侵攻ルートをイメージしていく。

「攻撃地点まで変針3回。最終変針点の左1500に新潟タワー今日は航空障害灯まで全て消えているから注意して！」

「了解！第1変針点まで1分」

HMDに映し出されるキューポイント、その横に表示される時間を亜季が読む。

「第1まで1分。異常・・・敵搜索波！高度10下げ」

ビーっという警告音とともに、利恵が叫んだ。

「クソッ！」

罵声をあげながら亜季は95式の高度を更に下げていく。

——今日の訓練はやけに厳しいじゃない・・・

高度40m。今頃、下は酷いことになっているだろう。

700キロを超える速度で疾駆していく95式。衝撃でガラスの一枚や二枚は割れているかもしれない。いや、間違いなく被害が出ている。

——こんな訓練、西側では絶対に出来ない。戦うことを忘れ、自分の欲望だけを主張する脆弱な資本主義者達には！

亜季はぺろつと乾いた唇を軽く舐めた。

今日の訓練目標は市内にある陸軍基地のグランドだ。そこにピンポイントで16発のレーザー誘導爆弾を投下する。

勿論、爆薬は空だが、それでも誤って市内に落とせば大変なことになる。爆撃だけでもシビアな訓練だった。

それなのに・・・

——さらに高度を下げるとはね・・・

「高度40。進路変更！目標まで変針点4、まもなく第1変針点！」

「了解！」

HMDに移るキューポイントがズレていく。進路が新しいものにアップデートされたのだ。

建物や司令部の指示地点（想定の対空陣地）があるので、ただ、真つ直ぐに目標に飛び込む訳にはいかない。

「30秒前・・・15秒前・・・用意・・・今！」

「今！」

利恵の声にハモるように叫んだ亜季は95式の高度を変えぬよう細心の注意を払いながら右へと機首を振った。

暗視装置越しに移る暗く沈んだ緑色の世界。墓標のように立ち並び黒い建物の影は、散々飛んだ越後山地の山奥とはまた違った不気味さがある。

——見過ぎるな・・・吸い込まれる。

集中はするが、一点を見つめ過ぎない。

亜季は自分に言い聞かせながら、計器と利恵の指示を頼りに95式を夜空に舞わせる。

——夜間飛行は簡単に人間の感性を狂わせる。自分の眼だけを信用するな！

「敵搜索波途切れる！次回変針予定時刻5分30秒後！変針点付近、航空障害物等無し！」

「肉！」

「何よ！板！」

「これ終わったら越後屋で一杯やろうよ！」

越後屋とは基地に入っている食堂の名前だった。勤務時間以外なら飲酒することもできる。

迫る黒い影。軽く機体を傾け、ビルを回避する。

未登録のアンテナか何かか？ほど良い緊張感が亜季の全身を包んでいた。

「どうした？利恵！アンタ、ビビってんじゃないでしょうね！？」

「ビビってなんかないよ！相棒が荒っぽいから苦労しているだけだよ！」

亜季の言葉に叫ぶようにして利恵が応える。

ヨタヨタと山間部のダムを狙って訓練していた頃と違い、彼女達には余裕があった。

繰り返される厳しい訓練は、彼女達の血肉となり、確実に亜季と利恵を空の獵犬へと変えていたのだ。

「第2変針点まで30秒前！」

「了解！」

第2変針点を超えれば、いよいよ市の中心街へと突入する。

利恵の言葉に亜季は肯いた。

——行くわよ！利恵。

——任せてよ！亜季ちゃん

夜空の下、

一瞬だけ、バックミラーに映る亜季と利恵の視線が絡まった。

Approach run(後書き)

感想等お待ちしております。

Re g r e t

「理系の視点で政治する。明解で明確な明日を作り出す」

それは、坂が政治家としての第1歩を踏み出す時に自分の後援者達を前に言った言葉であった。

まだ汚れを知らなかった若かりし頃に吐露された真情の一端。
やましい所はなにもなく、その言葉は紛れもない彼の本音であった。

揚げ足を取り合う言葉遊びに終始し積極的な政策を取ることができない国情を憂い、志を忘れ、己の利権を守ることだけに躍起となる先輩議員たちの惨めな後姿を見ながら、ああはならない、俺がこの国を変える。国民主体の新たな政治体制を築き上げると本心から言えたあの頃。煮え切らぬ言葉ばかりを並べ煙に巻くのではなく、方程式を解くが如くYESかNOかはつきりとうちだす。そう本気で信じていた。

執務室の中、最近では座るのさえ億劫となってきた総理の椅子に背を預けながら坂秀雄は大きく息を吐いた。

「・・・北関東共同工業地帯での資本出資率の変更及び関税の引き下げ。そして、我が国内における東日本企業の自由な進出、行動など・・・要点を纏めれば一方的なフリーパス権を要求しているに変わりません」

机を挟んで立つ事務官の報告は続いていた。

——まるで機械人形のような・・・

30代ぐらいか・・・まだ若い。かけられたシルバーフレームの眼鏡が理的な印象を更に強くする。政治という魑魅魍魎が躍る舞台において、日に日に魂をすり減らし、生きた屍と化しつつある自分とは違う。坂は悪化するばかりの現状から逃避するように若い職員の姿をジッと見つめた。

「更には先月、同工業地帯において発生した西日本企業内における東日本女性従業員に対する行き過ぎた指導に対する抗議も日増しに強まっており、これに対しても東日本から強い抗議の声が上がっており・・・」

「その問題は・・・」

「もはや事実関係ありません。当の従業員はすでに東日本に帰国していますし、この問題の第1報を上げたのは我が国のマスメディアです。今頃、その女性の方にも非があつた。企業の指導も適切であつたと言っても向こうは耳を貸しません」

言いかけた坂の声を職員の言葉が遮った。

「東日本労働者の質が低いのは当初から問題に上がっております。北関東に派遣されてくる労働者のほとんどが東日本における労働弱者、低学歴者や高齢者がその多くを占めています。我が国は政府主導により積極出資を余儀なくされていきますが、東日本にとってはいいのいい姥捨て山に他なりません」

島経済産業大臣が連れてきた経産省職員の感情の籠らぬ冷たい声が執務室に響く。

「利益を吸い上げられ、さらには社会福祉の一端までも肩代わりさせられる。こうなっては我が国にとって北関東はお荷物以外の何物でもありません」

「鳴神君、少し言葉を選びたまえ。総理の前だぞ」

わざとらしく咳払いをしながら島経産大臣が鳴神と呼ばれた職員を諫めた。

「しかし、大臣・・・」

「なぜだ・・・？なぜ・・・こうなる」

諫める島に向かい、かまわんよと力無く言いながら坂は机の上に並べられた数誌の朝刊を指で叩きながら言った。

西日本と東日本、両国が出資し共同運営する北関東工業地帯は緊張緩和と将来的な統一、国の形を取っ払うことは不可能でも経済的文化的には「日本」として一つとなることを目的とする民自党の目玉政策の一つであった。東日本に対し強硬姿勢を取り続けて、膨大な国防費を投入しながら、ただただ無用に緊張状態を叫び続けた前自由党政権。隣国、それも同じ日本民族となぜ争わねばならない。銃ではなく互いの手を握り合うべきなのだ。

「ここから両国にとっての真の意味での戦後が始まるのだ」

北関東工業地帯で初めての工場が稼働しはじめた時、坂が胸を張って言った言葉だった。

政治家になって20年。一党の長へ、日本の長へと上り詰めた。あの北関東の檀上こそが坂の人生において頂点であったといえる。その夢が・・・今、崩れ去ろうとしていた。それどころか民自党にとりアキレス腱に変わりつつある。

——なぜ、それが分からない！なぜ、互いに歩み寄ろうとしないのだ！平和より戦いを求めるとでもいうのか！？

坂は心の中で叫んだ。

悪質なクレーマーのように不当な要求ばかりを続け、一向に態度を改めない東日本。

友好の懸け橋となるはずだった北関東工業地帯も所詮、東日本にとっては外交材料の一つ、強請たかりの一つでしかなかった。今回のような事件も実のところ初めてではない。報道陣に公開されていない（バレていない）分も含めればそれこそ二桁を越えている。最近ではトラブルを嫌い、援助金を出しても北関東工業地帯への誘致に応じないとする企業も増えてきていた。

稼働から僅か1年にも関わらずこの状況。

「無論、当然のことではありますが、東日本の要求を呑むことは不可能です」

鳴神が再び口を開いた。

「すでに朝日政策（対東日本融和政策）の元、東日本に対する経済支援は有象無象、直接的な資金援助から農作物などに対する関税優遇などの制度上のものを含めると限界に達そうとしています。これ以上は・・・」

我が国の資本をただで東日本にくれてやるようなものです、と鳴神は汚いものを唾棄するかのように言った。

「北関東は我が国の経済にとって害毒以外のものではありません」

あまりに厳しい鳴神の物言いに島が嫌な表情を浮かべるが今度は注意をしなかった。島自身も鳴神と同じ意見だったからだ。

バブルの破たんから長期の不況に喘ぐ日本経済。

その舵取りを行う経産大臣として島もまた現状を座して見る訳にはいかなかった。

「小河さんからも五月蠅く言われている。経済の復活なくして社会保障の維持は不可能だとな・・・」

島と鳴神を見ながら坂は溜息をつきながら言った。

坂の言う小河とは厚生労働大臣を務める小河葉子のことを指していた。国民には品が良く愛想の良い婦人像の典型のように見られている小河であったが、根は恐ろしいまでの現実主義者であり、理想論に走りやすい性質を持つ民自党の中でも一目置かれている女性政治家の一人であった。

「マスコミの前では禁煙云々しか言わないが・・・僕の前ではね。この前も増税は何時行うのか？と厳しく問われたよ」

坂は言いながら自嘲的に笑った。

野党の時は増税反対の姿勢を強くしていた民自党であったが、与党となった今、党に所属する議員の誰もが現在の社会保障を維持するには増税しかないことを理解していた。

「消費税の増税は・・・」

言いかけた島は苦りきった坂の顔を見て途中で言葉を止め黙った。言わなくても分かっている。非難まじりの色を湛える坂の目は無言でそう言っていた。

消費税を上げればただでさえ苦しい内需はさらに落ち込みを見せるだろう。内需が落ちれば企業や自営業者、当然のことながらその会社に勤める社員達の給料は減り、最悪人員整理（首切り）が行われる。そうなればどうなるか・・・語るまでもなかった。弱者救済や社会保障云々以前の問題だ。国ごと遭難する訳にはいかない。しかし、体力のある者（巨大企業等）だけを守る訳にもいかない。日本は国債の多くを自国内で運営しているので状況的には他国より幾分かはマシだが、借金に頼る予算運営が不健全であることは誰の目にも明らかであった。

速やかな増税。緊縮財政だけではもはやどうしようもなかった。しかし、踏み切れない。

「安全保障に社会保障か・・・」

呟くように坂は言った。

その姿は、20年前に自分の支持者を前に力強く己の夢を語った男の影は何処にもなかった。

増税すれば選挙に勝てない。与野党が入れ替われば、言うことも入れ替わる。

本来なら誰よりも冷静に見つめなくてはならない現実には背を向け、ただ理想だけを謳う。

「国のトップとは存外寂しいものだね・・・」

国民は自分のことを決断できぬトップと笑う。だが・・・違うのだ。国民が望まぬから決断できない。

大多数の幸福の為に本来なら取捨択一せねばならぬのに、全ての幸福を追求する、またそれを望まれるから身動きが取れない。

「僕は何をどうすればいいんだ？」

国内も国外も上手く回らない。坂は自嘲気味に小さく笑った。

世界は黒一色で塗り固められているかのようだった。

対地高度50m、時速700kmで流れていく世界。

そんな中、人の視覚が果たせる役割なんて僅かに感じ取れる濃淡だけしかない。

人間の持つ感覚を超えた、この空を様々な機器のバックアップを受けつつ踏破する。

暗視装置の作り出す淡い緑色の空間情報を読み取り、判断処理。
ミスなんて許されない。

ミリ単位というのは大げさだけど1センチでも多くサイドスティックを余計に押し込めば山肌に激突、一瞬で無機物と有機物のローストが出来上がる。

——今は何も感じないけど・・・

一個の機械のように戦闘機を操りながら亜季は漠然と考えた。
酷く強張った体を隊舎の湯船でゆっくりと解きほぐしていく。

——気持ちいいだろうな——

ピーっと音を抑えられた警報音が控え目に鳴る。

1ミリ、いや2ミリだけ亜季はサイドスティックを押し込んだ。

亜季の意志に応えるように95式のフライトコンピューターは彼女の動作を電気信号へと変え、機体各部の翼に命令を送った。

機種のカナード翼をはじめ、95式各部の可動翼が動き、機体表面を流れる気流に変化を与える。僅か機種を下げる95式戦闘爆撃機。

東日本が世界に誇る大柄で美しい戦闘爆撃機は空を飛ぶと云うよりは地表の上を滑るかのように西日本との国境沿いの山峰の間を飛びぬけていく。

「減点1だよ。亜季ちゃん」

「お生憎様。警報は高度45mに設定してあるのよ。指定高度は超えていない」

後席に座る利恵の文句を受け流しながら亜季は応えた。

西日本が張り巡らすレーダー網は、世界でも最強クラスの探知能力を誇る。ステルス機でない以上、この監視網を抜けるには、ただひたすらに低く飛ぶしかなかった。飛ぶには障害物でしかない山々が電波から愛機を守る障壁として自分達の姿を隠してくれる。高価な電波吸収材も塗料、維持整備も必要ない。AWCSが持つルックダウンレーダーはどのようなものもないが、固定式のレーダーサイト相手ならまだ超低空侵入という戦術機動はまだ魔力を失っていないかった。戦争は常に矛盾の關係に終始する。そんな理屈さえもぶつ飛ばせる国が世界でも一つだけあるが、幸いなことにそれは西日本ではない。

「屁理屈。どうせ余計なこと考えていたんでしょ」

「首、肩、腰、風呂」

恐ろしく省略された応答を返しながら亜季は機体を操り続けた。夜の空をチタンとアルミ、炭素複合材で作られた人造の怪鳥を飛ばす。慣れきったとはいえ楽なことではない。

「ババア」

「五月蠅い」

利恵に短く応えながら亜季は常に視界の隅に高度計の数字を置きながら両手を動かし続ける。

何時もより、ほんの少しだけ機体の反応が遅く鈍い。亜季はタイミングを計る時計の針を少しだけ進めた。

—— 甲1（制空任務）と乙2（阻止任務）の間ぐらいかな。

翼端に1発ずつ、主翼に2発ずつ。そして、腹の下に大物を1発。搭載限界まで誘導爆弾を装備する乙2兵装よりは軽いものの、大きく張り出した61式（採用年ではない）空対艦誘導弾が抵抗となり拳動を乱す。

「これじゃあ最大射程300キロも形無しだね」

61式の性能なら新潟上空から撃つても東京の中心を狙うことができる。

「高価な的をくれてやる必要はないわ。敵の懷まで飛び込んでブスリッ。今も昔はやることは変わらない」

兵器管制を司る利恵としては面白くないのだろう。不満そうな声を上げる利恵に亜季は生真面目に答えた。

「そんなこと分かってるよ」

案の定、利恵が先ほどとは別の理由で不満げな声を上げた。

射程300キロというのは空気抵抗の少ない高空を飛行した場合だ。低空飛行な61式の性能は半分以下の120キロまで激減する。それに実際には、大気の壁の前にもっと分厚い壁が61式の前に立塞がる。

「国境沿いの対空陣地に東京湾のミサイル巡洋艦、それに戦闘機の迎撃も」

「分かってるじゃん。胸ばかりに栄養がいつているようだからボケたのかと思っただわ」

「亜季ちゃん……夜道には気をつけた方がいいよ。敵をブスリとやる前に自分が……」

「肥えた牛女に遅れを取るほど私は鈍くないよ」

「こ……殺す！」

怨嗟に満ちた利恵の声。さすがに現状で後席の様子を確認する余裕はない。

ギリギリと歯ぎしりしているだろう相棒の顔を思い浮かべながら亜季は僅かに口元を歪めた。

「まあ……冗談はさておきどうなのよ。専門家としてわざ？」

グルグルと猛犬のように未だ呻り声を上げる利恵に亜季は問いかけた。

彼女自身も搭載する兵装のことは教育を受けているが、兵装士官である利恵ほど専門教育を受けている訳ではなかった。

「……脳筋」

「その脳筋が操る戦闘機に乗っているのは誰かな」

僅かに機体を傾けながら迫る山肌を回避する。笑いながら亜季はもう一度問いかけた。

「無意味な訓練って訳じゃないんでしょ？」

「そうだね・・・国境から遠い百里は無理でも厚木とか入間は確実かも。敵の対応次第では湾内のミサイル巡洋艦もやれるかも」

亜季の問いかえに考えるように利恵は答えた。

61式の売りは何も射程だけではない。最大の売りは何と言って
もその足の速さだ。高度20mでもマツハ2を超えるその章駄天
ぶりは目標との距離が縮まれば縮まるほど生きてくる。発射から1
分と少しで40キロを飛ぶ61式。逆を云うと目標から40キロ圏
内まで肉薄することが出来れば61式を迎撃することはほとんど不
可能ということになる。

「そうなつてくると・・・後は私の腕次第ってことかな」

山峰の間を吹く風は不規則で容赦ない。流されかけた愛機に一鞭
入れながら亜季は言った。

利恵の言った言葉が東日本空軍が山間部において超低空侵入訓練
を繰り返す理由の全てだった。国境沿いの山々を盾に西日本の防空
陣に肉薄し、敵のリアクションタイム（対応時間）を奪い取る。勿
論、西日本も常時、警戒機を上げるなどの対応を取っているだろう
が、それにも限界がある。100機襲つてくるかもしれないから常
に100機飛ばしておきますという訳にはいかないのだ。古来から
攻めるより守る方が難しいのは常識。そして、西日本は「絶対に」
攻めてこない。戦力的に優位とはいえない東日本にとって地勢的、
法的優位を活かすことに躊躇はなかった。

「甘いね。亜季ちゃん。私が居なけりゃあ電子戦が疎かになっちゃうよ」

「はいはい。そうですね」

「うあ・・・操縦士病（自分の腕だけを信奉し、電子戦等を軽視する）だ！いい？監視衛星にうちの航空基地は24時間見張られているんだよ！日本海にはミサイル巡洋艦が常時警戒もついている。上がった瞬間、こちらは追跡対象なんだ。山の中を飛んでいるからといって安全が確保されている訳じゃないんだよ」

軽く応える亜季に利恵は口を尖らせながら言った。

敵も馬鹿じゃない。公式非公式に関わらずこちらの攻撃を防ぐ手段をこうじている。

「ゴメン。分かってるわよ。アイツらは強い。宣伝省が言うように軟弱な存在じゃない」

操縦士徽章を取ったばかりの頃は無邪気にプロパガンダを信じていた。だが、それが誤りであることに気付くのに時間はかからなかった。

防空識別圏（互いに主張し合い、重なり合っているけど・・・）に少しでも足を踏み入れ様なら必ず上がってくる迎撃機。

迎撃機は時にはレーダーを？い潜っているはずの超低空侵入訓練の時には表れた。それも一度や二度ではない。

亜季は真面目な声で返した。もしかしたら苛烈なエリント合戦を行っている利恵の方がより現実を把握しているのかもしれない。なにせ電波は目に見えないのだから・・・。周波数情報の奪い合いは平時からも行われている。電波発振の制限や敵の電子情報の収集。兵装管制以外にも後席の仕事は沢山ある。

「安全と思って飛んでいると上から被られてズドンだよ」

「後方警戒を一任する」

利恵の言葉を聞いていると狭い空がさらに窮屈に思えてくる。

応えながら亜季はスロットルを僅かに押した。高まる95式のエンジンの呻り声。

「明日は空戦訓練がやりたいな・・・」

「残念でした！明日も明後日も夜間侵入訓練だよ！」

亜季の愚痴に利恵が意地悪い声を上げる。

「現実逃避ぐらいさせてよ！」

自由に空を舞いたい。窮屈な夜空の下、亜季は叫けびながら愛機を飛ばし続けた。

開けられる双眸。室内は未だ夜の闇に囚われたままだった。

右手に刻まれた古傷が疼く。

鼓膜を叩く雨の音。寝る前は降っていなかったのと楓はゆっくり

とベットから身を起こした。

隣で眠る長門を起こさぬようにソツと両足を床へと降ろす。

奥に刻まれた疼痛。情事後特有の気怠さが楓の体を支配していた。

愛する者と過ごす夜。人としての幸福がそこにはあった。

サイドテーブルに置かれたペットボトルを手に取り、乾いた喉へと流し込む。

すっかりぬるくなってしまった水に一瞬顔を顰めながらも楓は飲み続けた。

「ふ」

ペットボトルの水を飲み干し、小さく溜息をつく。

闇に慣れてきた視界の中、楓は右手を天にかざすようにしながら己の体に刻まれた傷跡を見つめた。

脳裏をよぎる妹の顔。リゲルを胸中に抱き、こちらをジッと見つめる亜季の顔が浮かんで消える。

思えば妹のことを思い出すのも酷く久しいような気がした。

疼く右手の傷を夜の闇に透かすようにしながら楓は立ち上がりガラス戸の傍へと足を進めた。

意識がはつきりしていくに従って鼓膜を叩く雨の音が強まってくる。雨は思ったより強く降っているようだった。

「酷い天気」

外を眺めながら楓は小さく呟いた。

僅かに開けたカーテンの隙間、ガラス戸を打つ横殴りの雨が水滴となり川のように流れていた。

「亜季……」

外の様子を窺いながら楓は痛む右手をそつと胸に押し抱いた。

酷く心が乾いていた。言いようのない思いが楓の胸中を這いずり回る。

あの時、一人で飛びださなかったら……楓は、もう数え切れぬほど足を踏み入れた思考の袋小路へと再び考えを巡らした。

「ごめん……」

楓の口から小さな声が後悔の想いとともに漏れ出た。

なぜ……手を放したのか……なぜ……迎えにいかなかったのか……気を失っていたなんて理由にならない。あの子はずっと待っていた筈なのだ。

コツンとガラス戸に額を預ける。ガラス戸に額を付けたまま楓の両肩が小さく揺れた。

「ごめん……ごめんなさい……」

後悔の念が楓の全身を侵していた。

「私だけ……私だけ……」

少しでも妹を助ける力が欲しいと想い軍人となった。
それなのに・・・いつの間にか現実流され、亜季のことを忘れ
つつある。

その上・・・楓はベットの方に視線を向けた。窓の外で閃光が光
る。

最愛の男。将来、自分の伴侶となるべ男の眠る姿を見ながら楓は
涙を拭った。

——私はズルい女だ・・・

妹の為に泣く自分のことが酷く薄ぺたく感じられた。

——これは誰の為の涙なのだ？

つんざく様な雷の音が部屋に響いた。

妹の・・・亜季の為。いいや・・・違う。これは自分可愛さから
流れる偽善の涙だ。

忘れていた。たまに思い出したように流す涙になんの意味がある
？そう考えると涙を流す自分のことが酷く滑稽に思えた。

「スン・・・ふ・・・ふ・・・うつ・・・」

楓は泣きながら笑った。

また、外で光が走る。暗かった部屋に一瞬だけ明るさが蘇る。
床に映る自分の影。その脇には脱ぎ散らかされた二人分の衣服。

——こんな有様で・・・私は・・・

時は無情だ。進むだけでやり直すことなんてできやしない。
そして、そんな現実に流されるだけの自分のことが酷く情けな
かった。

「亜季・・・貴女は一体何所にいるの・・・？」

楓は右手を抱いたまま呻くように言った。

S o u r c e

日本海上空、高度6000メートル。

夜とはいえ、雲の上に出ると夜空は意外なほど明るい。

柔らかな月の光は、夜の闇が作り出す漆黒のベールを少しだけ開けることを人に許してくれる。

「真っ暗な中、低空を這いずり回るばかりじゃ息も詰まるもんね」

フルムーン。夜空に、くつきりとした球形の姿を浮かび上がらせる月を見上げながら亜季は呟いた。

相変わらずの夜間飛行とはいえ、自由に空を舞える幸福に嫌が応にも気持ちが昂る。

ここ1ヶ月、偏屈なほど続いた夜間低空侵入訓練。久しぶりの空戦訓練に亜季の機嫌はとても良かった。

月から前方へと視線を替え、ざっと計器を流し見て、己の操る機体に異常がないことを確認する。

「甲2（制空任務）装備だしね。機体も軽いよ」

亜季の言葉に合せるように後席に座る利恵が口を開いた。

ロシア人が産み、日本人が鍛え上げたS u i 27シリーズの中でも最強クラスの攻撃力を持つ95式戦闘爆撃機。

最大搭載量8トン以上を誇る95式にとって、全て合わせても3トン程度にしかない対空兵装など重荷にもならない。

東側最強戦闘機の系譜に連なる怪鳥は、空対空（ダミー含む）ミサイルを大小12発抱えながらも、その機動に僅かな揺らぎもみせなかった。

「そうね。61式はデカイし、重いし。ほんと誰か・・・」

「亜季ちゃん、そのネタはもういいよ」

何時もと同じ様にからかおうとする亜季の言葉を、利恵はチツチと顔の前で指を振りながら遮った。

「嫌味一つでも同じことばかり言っていると飽きられるよ」

「はあー飽きられるって誰によ？」

利恵の物言いに亜季は首を傾げる。

「勿論、私！」

「フツ、フハハ・・・何やってるのよ？貴女・・・馬鹿じゃないの」

自分の顔を指差し、胸を張る利恵。そんな利恵の滑稽な姿をバツ

クミラー越しに見ながら、亜季は笑みを浮かべた。

「フフン！馬鹿は捻りのない亜季ちゃんの方だよ！」

亜季の笑い声に利恵もまた口元を緩め、言葉を続ける。

「胸と同じで頭も固いんじゃないの？」

「五月蠅い！調子のんな！そっちこそ捻りも何もないじゃない」

「言いだしっぺはそっちだよ！」

笑いあいながら二人は軽口を叩き合った。

「61式がデカくて、重いのは事実でしょ！」

「その後だよ！」

指先一つ、ボタン一つ弾くだけで死をまき散らすことのできる殺戮機械のコクピットには似つかわぬ、少女達の華やいだ声。

その時だけは、亜季も利恵も東日本空軍戦闘機パイロットという仮面を脱ぎ捨て、年相応の表情を浮かべていた。

——フフツ……やっぱり空は広い方がいいわ。

利恵に構いつつ、亜季はまた空を見上げた。

「ほんと……久しぶりに見た気がする」

見上げながら小さく呟く。

黒に黒を重ねた様な低空飛行とは比べるべくもない。亜季は不思議な解放感に身が包まれる想いがした。

まもなく訓練空域に入る。そこには仮想敵を務める89式（Su-27）が自分達のことを待ち構えているだろう。

——ただど……ほんの少しの時間しかないけれど……

思想も信条もない。ただ子供の様に無垢に空を楽しむ。亜季は口元に浮かぶ笑みを大きくした。

「んん……どうしたの？ 亜季ちゃん」

急に静かになった亜季に、利恵が訝しげに問いかける。

「なんかさ……」

問いかけてくる利恵に、亜季は問いかけて言葉を一度切った。

月の明かりに浮かび上がる雲海。分厚く、真っ白に輝くその姿は、祖国の大地を覆う雪のようでもあった。

「なんか楽しいなって！」

亜季は大きな声で叫ぶように言った。

——色んなモノを背負って飛んでいる。仲間の為であつたり、国の為であつたり……姿形は見えないけれど、確かな「重さ」を感じるモノを。

「でもさ・・・」

言いながら亜季は突然、機体をロールに入れた。

「な・・・ちょ・・・亜季ちゃん！」

利恵が抗議の声を上げるが無視。進行方向を軸に、そのままグルグルと回り続ける。

「フ・・・フハハハ。ねッ！ちょっとぐらい我儘に飛んでもいいでしょー！」

「もうー何がちょっとぐらいよー」

「貴女だつて楽しんでるでしょ！それッ」

声とともに亜季は僅かにサイドスティック（操縦桿）を押し込んだ。

「ちよつとー！」

利恵が抗議の声を上げるがもう遅い。

ロールを続けていた95式は、パイロットに忠実に反応。回転をそのままに滑るように高度を下げる。

そのまま高度を一気に千メートルほど駆け降りた所で二次燃焼装アフターバー置に点火。^ナ

「どっせーい！」

「亜季ちゃんのアホー！」

95式のコクピットに響く二人の叫び声。亜季と利恵、二人の体を加速Gがシートへと叩きつける。

ダイブ&ズーム。降下することにより稼いだ運動エネルギーにエンジンパワーを加えた95式は垂直上昇。あっという間に失った高度を取り戻す。

——最高ッ！

気持ち良かった。全身を締め付けるGもめまぐるしく変わる風景も……。耳元で地上管制班が何か言っているが無視。

背後で乳牛がグルグル呻っているのだけが気ばかり（利恵はナビも務めている。燃料計算も後席の重要な仕事の一つだ）だったが、許されるのなら、もう一発行きたいところ。

「もういつ……」

「絶対ダメ！」

「それは残念」

シレっとした声で答えながら亜季は機体を左右に軽くバンクさせた。

「やったらコンビ解消だからね」

「やらないわよ。ちょっと機体の様子を探っただけ」

不審げに言う利恵に、舌を出しながら亜季は言った。

訓練空域まで後僅か。東日本空軍パイロットに戻る時間が迫っていた。

責務を果たさなくては、権利は得られない。守りたい権利は勿論、95式のシート。

その為には何だって・・・、

「343（東日本空軍戦闘第343航空隊）なんかに絶対負けないわよ！」

その顔に好戦的な笑みを湛え、亜季は言った。

アクレッサ
仮想敵を務める戦闘343は東日本でも最強と謳われる戦闘機部隊だ。

戦闘343と亜季達が所属する戦爆131とは、その主任務の差こそあれど強いライバル関係にあった。

「夜の空が誰のモノかたつぷりと教育してあげなきゃね」

亜季の言葉に利恵も同意する。

佐渡島西方80マイル。目に見えぬリングロープの張られた大空の決闘場がそこにある。

待ち受ける相手は強敵。亜季は自分の中で何かが変わっていくのを感じていた。

研ぎ澄まされていく感覚。体の作り、変わるはずのない体組織さえも戦う為の何か変わっていくかのような気がする。

女から戦闘機械へ。伏倉亜季と云う個人は消え、東日本空軍少尉

という認識票をぶら下げた一人の戦闘機パイロットが現れる。

狩りの時間が迫っていた。狩人になるか、狩られる獲物になるかは己の腕次第。

「いくよ！」

亜季は呟きながらスロットルレバーを静かに押し込んだ。

空に自由がないことに気付いたのは何時のことだっただろう。

無数に引かれた国境線や防空識別圏、民間航路に米軍管制空域。運輸省が定める法令に自隊規則。まったく不愉快だった。

燃料が続く限り何処までも自由に空を舞うことが出来る能力を持ちながら、目に見えぬ鎖で雁字搦めに縛り付けられた鋼の大鷲。

——今日だってそうだ……。

イーグル形態？型、最近では、アドヴァンストイーグルの通称で呼ばれ始めた愛機の中、楓は不満げに鼻を鳴らした。

「東日本空軍機に告ぐ。貴機は我が国の領空を侵犯しようとしている。速やかに進路を変更せよ」

眼前を悠々と飛行するJフランカー、東日本人達が89式と呼ぶ戦闘機の横に付き、定められた言葉を繰り返す。

もう幾度、繰り返したか分からない。

「はあ・・・何時まで続けるつもりよ」

楓は、８９式のコクピットを見ながら大きな溜息をついた。

この分だとビンゴフェル、燃料が切れるまで帰るつもりはないの
だろう。

その証拠に８９式は、大きなエイトパターンを空に描きながら同
じ場所をグルグルと回っていた。

「早く帰れよ・・・」

呻くように言いながら楓は、回る８９式に続いて、イーグルを旋
回させた。

社交ダンスの様に一定の距離を保ってピタリと張り付く。何時も
図々しい東日本軍機であったが、ここまで露骨な態度を取ることは
稀だった。

一向に引こうとしない東日本機。その翼には、これ見よがしにと
電子戦ポッドの姿まであった。

「当空域での軍事行動（情報収集活動）は認められない。速やかに
活動を中止し、本空域から退去せよ。繰り返す。当空域での軍事行
動は認められない・・・」

旋回したことにより８９式の進行方向が変わる。楓は、先ほどと
は別の警告を繰り返した。

群馬上空、複雑怪奇に入り組んだA D I Zライン（防空識別圏）は、東と西、双方の日本にとって互いに領域を主張し合う厄介な場所だった。

こちらが主張する様に、東日本もまた「この空」を自分達のモノだとして扱っている。

——それでも限度つてものがあるでしょ！

楓は悠々と飛行を続ける89式の姿を睨みつけた。

互いの領有を主張し合う群馬上空はこれまで非武装地帯、云うなれば一種の緩衝地域としての役割を担ってきた。

南北に長く伸びる日本列島も、列島の幅を見ればさして広くない。ましてや現代戦闘機の健脚を持つてすれば離陸からものの数分で、両国の主要地域が攻撃圏内に入ってしまう。

相互確証破壊と呼ばれる考えの中、仮初めの平和を享受しあってきた日本。

本気でやり合えば共倒れになる。それは外交の一環として、軍事力を行使することに躊躇しない東日本も理解しているはずだった。いや、軍事力を是とする東日本だからこそ、北関東緩衝空域（地域）の意味を誰よりも理解していると考えられていた。

それなのに・・・、

「D C U N K N O W N I n a b i l i t y c o n t a c t（不明機とのコンタクトが取れない） R e c o m m e n t G U N（警告射撃を要請する）」

「R i g e l N o t G U N（警告射撃は許可しない）」

「チツ・・・DC UNKNOWN Enforcement
L（不明機は電波情報を収集中）Recommendation GUN」

何たる弱腰だ。楓は苛立ちを隠さぬように舌打ちしながら繰り返した。しかし、

「Riegel Not GUN repeats Not GUN
（繰り返す。警告射撃は許可しない）」

これが「高度な政治的判断」というものなのか。地上、要撃センサーからの指示は変わらない。

互いに軍事行動の兆しを厳しくけん制しあうことにより秩序を保ってきた。

それなのに・・・あからさまに電波情報を収集している敵機、エリント機に対して警告を行うこともできない。

全ては現政権が掲げる対東日本融和政策の為だった。東日本との関係が拗れる度に譲歩し、相手の一步を許す。

仲の良い隣人ならそれも良いかもしれない。それが大人の対応というものだろう。だが、際限のない譲歩は国際政治、外交交渉の場で致命的だった。

北関東工業地帯における人権問題から始まり、東日本は日に日に態度を硬直化させつつあった。それを宥めるかのように、また譲歩する。

「Riegel Calm down（落ち着けよ）」

「・・・Rog（了解）」

僚機から気遣いにも不機嫌さを隠しきれない。

「・・・Rigel same heart（俺も同じだよ）」

「sorry Thanks・・・」

旋回ポイントに来たのだろう。89式が旋回に入る。仲間の言葉に礼を言いながら、楓もまたイーグルを旋回に入れた。

——いつもババを引くのは現場だ・・・。

俺も同じだ。仲間の言葉が胸に沁みる。

「ありがとう」

現代戦闘機のコンバットフォーメーションは広い。遠くで自分と同じ様にけん制飛行を続ける僚機の方に目をやりながら、楓はもう一度小さく呟いた。

好意を持ってもらおうなんて思わない。認められなくていい。だけど・・・理解して欲しかった。

軍人が好かれ、敬意を集める国家なんて間違っている。でも、軍事力、上に立つ者なら最低限、力を持つことの意味、重要性を知るべきだ。

楓は緩やかに旋回を続ける89式の姿を見ながら思った。

先ほど声をかけてくれた僚機もまた眼前のエリント機のエスコートを追って、この付近を回っているだろう。

——今日は何機上がることなるやら。

この分だと交代機を出す必要があるかもしれない。89式は元となったSui27の良好な長距離飛行能力（航続距離約4000キロ）をしっかりと受け継いでいる。

防御側は、やり逃げすれば良い攻撃側とは事情が異なる。もしもに備え、余力を残す必要があった。こちらは燃料カツカツまで粘れない。

楓は無力感と徒労感をこちゃまぜにしながら、それを義務感で覆い隠そうと努力した。

張子の虎だろうが、何だろうが黙って見逃す訳にはいかない。両手を縛られながらも胸を付き出し、押し返す。

危機的状況の中でも、航空自衛軍は最善を尽くそうとしていた。厳しいローテの中から、One On One（一対一）を保つ。

激増する東日本機の領空侵犯に対し、常に要撃機を上げ、戦う（戦える）姿勢を示し続ける。それが楓達、西日本軍人の考える抑止力だった。

「東日本空軍機に告ぐ。貴機は我が国の領空を侵犯しようとしている。速やかに進路を変更せよ」

また、旋回により89式の進路が変わる。

楓は警告を繰り返した。それが今、彼女にできる唯一の術だった。

「繰り返す。貴機は我が国の領空を侵犯しようとしている。速やか

に進路を変更せよ」

89式に寄り添うようにピタリと張り付くADイーグル。神経をすり減らす蒼空のつばぜり合いは、89式が緩衝空域を出るまで続けられた。

最前線に問題が存在する様に、後方、決断を強いられるトップもまた最前線とは異なる問題が存在する。

定められたことを定められた範囲、与えられた能力でこなすフロントとは違い、様々な問題を有機的に処理判断し、状況を創造せねばならないヘッドクォーター。

強いプレッシャーを受け続ける最前線が大きな困難を強いられるのは当然のこと。だが、思考するという点では、トップが果たさねばならない労力は、前線より遙かに大きい。

トップは、現場のことが分からないと云われるのは、どの世界でも共通することだが、それは逆をいえば当然のことでもあった。

立場が違う。考える視点が元から異なる。時には目指すべき方向性さえ異なる。

最前線を担う軍隊と、その軍隊を統率し、軍事力の効率的運用を行わなくてはならない政府の思考、方向性が一致しない。

トップと現場の思考の差異。そして、その差異を埋めることができない。現在、西日本の置かれている状況は、まさしくその状態であった。

「現状、東日本が軍事的解決を望んだ場合、前面戦争の可能性こそ低いものの紛争レベル、具体的には群馬国境線付近、もしくは日本海における戦闘が予想されます」

「昨年に比較し、東日本軍機による関東方面への領空侵犯が倍増しております。日本アルプスなど国境沿いでの山地低空侵入訓練も活発に行われているという情報もあり、最悪、首都圏への攻撃も予想しております」

「何で君達は、そうやって危機感を煽ることばかり言うのかね」

眼前に並び立つ制服姿の男達。軍事顧問として陸海空、3軍より内閣に送り込まれたエリート軍人達を前に、坂は不機嫌さを隠そうともせず言った。

「東日本軍の活動状況から・・・」

黒いダブルボタン、海軍の制服に身を包んだ男が口を開きかける。

「それは今聞いた。例年より活発に活動しているのだろう！」

「いえ・・・それだけでは・・・」

「飛来する飛行機が多い。出港する船が多い。山間部で飛び回っている。どうして、それが戦争に直結するんだ？訓練なんだろ！」

坂は男の言葉を遮って言った。

「軍は何時もそうだ。危ない、危ないと騒ぎ続け、毎年莫大な国防

予算を奪っていく。

これ見よがしにつけられた勲章（国防記念章）が、坂の苛立ちを加速させる。

——何も生み出さない壊し屋どもめ・・・

お前達に誇るべきことなど何もない。軍は何も生み出さないではないか。坂は目の前に立つ軍人達を睨みつけた。

軍事産業が技術、経済に恩恵をもたらす？年間、幾ら国防予算が投入されていると思っているのか。その分、産業保護に回した方がマシだ。

災害派遣？軍が行う必要などない。消防、警察、海保にだって出来る。無理なら新しい防災組織を立ち上げてもいい。

国際貢献でもそうだ。テロを撲滅するといいながら、アフガンでも中東でもいまだ然したる成果は上がっていない。

治安を向上させるなら軍より警察組織が先であろう。考え方が間違っているのだ。

軍は何も生み出さない。軍事力は何も為さすことが出来ない。

技術進歩や思考の変化、時代の進化は、世界のグローバル化を促進しつつある。

——考え方が小さいのだ。島一つがどうのこうの。群馬上空がどうのこうの言っている場合か！

一向に態度を何させない東日本。もしかしたら原因は過剰な軍の対応にあるのではないか？

ナイフ（軍事力）をチラつかせながらの交渉など、そこいらのチンピラと変わらない。

互いに銃を突きつけあって話し合いなど出来る訳がない。歯には歯をでは、いつまでも負の連鎖は終わらない。

銃の次は大砲。大砲の次はミサイルか？軍の理屈はいつもそうだ。相手が向けるので、こちら向けます。相手が持っているので、こちら持ちます。

——どちらかが先に矛を収め、話し合いの席に着くよう勧めるしかないのだ。なぜ、それが分からない！？

「レポートは見た。君達の話も聞いた。だが、僕にはどうして戦争になるかが分からない」

「戦争になるとは言っていません。先ほど述べてた通り、可能性があるのです。東日本が決意した場合・・・」

「言ったじゃないか！群馬か日本海で戦争になると！ええ、ここも東京も爆撃されるんだろ！」

強い口調で言う坂に、たじろいだ様に男は黙り込む。男の胸に張られたネームには田所とあった。

「田所君。説明したまえ。何で戦争になるんだ？根拠を、根拠を言いたまえ」

「ですから・・・可能性の・・・」

「起きるのか！？起きないのか！？」

起こらないとは言えない。だからといって起きるとも言えない。想定し、それに備えることを必要とする軍にとって、坂の言葉は酷なものだった。

外交と軍事力は、互いに強い親和性を見せるもの、その内封される性質は異なる点が多い。特に開始点における思想は、まったくの逆といえる。

徐々に圧力を強めていく外交と、初動全力での行動を是とする軍事力の行使。軍事力の行使においては、何かが起きた時には既に手遅れなのだ。

だが、坂の考えも全てが謝りとはいえなかった。

過剰な軍事的反応は無用な緊張を招きかねないのも事実。要はバランスの問題であつた。外交と軍事の本質は異なる。しかし、両者を別々に扱うことはできない。

「・・・・・・・・・・」

坂の言葉に田所は黙るしかなかった。

「起きないんだな！」

「・・・・現状では判断できません」

起きないと云わなかっただけでも田所を褒めるべきだろう。

だが、決断する場において、どちらとも取れる答えは絶対に避けなくてはならない。それが上であればあるほどに・・・・。

「今、分からないということは、起きないんだよ」

田所の言葉を聞いた坂は叩きつけるように言った。

現場の声（情報）がトップに正確に伝わらなかった瞬間だった。

西日本の不幸がそこにあった。

第2次世界大戦とその後の祖国分断。あまりに凄惨な戦争の記憶は、国民に現実を見ることを忌避させ、軍人に政治に深く介入することを躊躇させた。

追い立てられるように総理執務室を後にする田所ら、軍人達。

歴史に必然などなく分岐点があるとしたら・・・今日、この日が西日本にとつての最後のターニングポイントであった。

分断から半世紀。二つの日本の間で、くすぶり続けた火種は再び大きく燃え上がろうとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9218p/>

鼓星の下で ~ The Sky Where You Were ~

2011年11月30日18時51分発行